



僕たちは、学校の食堂でそうめんを囲んでいた。

時刻は8時。朝ではなく夜のだ。

あたりには僕たち4人以外に誰もいない。

こんな時間に食堂に来るような生徒はいないだろうし、そもそもこの校舎には24時間僕たちと一部の例外を除き、誰もいない。

僕たちは使われなくなった校舎、通称旧校舎で寝食を共にしているのだった。

僕がいかにして旧校舎で日常生活を送ることになったかとか、そこでの出来事等々を語る前に、さしあたって、3人の家出少女を紹介しよう。

まずは僕の正面の席から立ち上がって、色付きのそうめんを収集しているのは佐渡帆希（さわたりほまれ）。

同じ学年の女子で、僕よりも一月ほど前から旧校舎に住み着いていた少女だ。僕がここに住むきっかけとなった人物でもある。

ゲームが趣味だけど、その腕前はちょっとばかり悲劇的なので、あまり言及しない方が良くだろう。

かなりのお嬢様で、箱入り娘というか世間知らずというか、色々残念な体験には事欠かない。「何だ落乃（ふきの）、残念そうな顔をして……ハッ！ さては私の色付きそうめんがうらやましくなったんだな!? よしよし、1本だけあげよう！」

帆希は箸でピンク色のそうめんを掬うと、僕の方に身を乗り出してきた。あー、机の上をちゃんと見ないと……

「うわっひゃ！ コップ倒しちゃった！ 布巾布巾！」

……次に、僕の左隣で黙々と麺をすすっているのが茜橋凜々（あかねばしりり）。数えていないけど、既に20杯くらいはおかわりしているんじゃないだろうか。

彼女も僕たちと同じ学年だ。成績はトップクラスなものの、道を覚えるのが苦手で、常に学校内をさまよっている。

もうここに来てから数週間経つけど、いまだに旧校舎内で大規模な捜索が行われることがある。

できるだけ彼女から目を離さないようにしないと。

「……ふーちゃん、そんなに見られたら恥ずかしい」

そして僕の右隣、ほとんどくっつきそうな距離の場所にいるのが僕の妹の雪乃（ゆきの）。中学3年生。

彼女については出来るだけ話したくないというか、深く考えようとするとも身体が震え、胃が痛み出す。

帆希が、僕が旧校舎で暮らすきっかけだとすると、雪乃は僕が実家を飛び出した元凶だ。

それが何故また同じ場所で暮らす羽目になってしまったのか。帆希と凜々がいなかったらとつとくに再度の逃亡を検討しているところだ。

「お兄ちゃん、何で食事中にぶつぶつひとりごと言いながら頭抱え込んでるの？ 悩みがあるならベッドの上で聞くよ？」

たぶん彼女が、悩みの原因が自分だって事に気付くことは無いんだろうなあ……。

「落乃。悲しいお知らせがある。落乃がひとりごと言ってる間にうっかりそうめん全部食べちゃった……」

「うおおっ！ しまった！ まだ一杯も食べてなかった！」

「ごめんふーちゃん。我慢できなかった」

「私のお椀にまだ少し残ってるから口移しで食べさせてあげるよ」

……まあそんな感じの日常が続くのだった。

1 家出少女と旧校舎

化学の先生の髪が実はカツラなんじゃないとか、古文の先生が昔暴走族だったとか、とかく学校にはゴシップ・噂話が絶えないものだけど、旧校舎に関する話もそのうちの1つだった。

どうやら女の子の幽霊が出るらしい。

僕が通うこの高校の校舎は、今年に入ってから完成した建物で、丘の麓に建っている。

だけど僕が去年ここの学園祭に来たときは、校舎は丘の頂上に建っていた。新しい校舎が建った現在でも残されているその建物は、今では旧校舎と呼ばれている。

その旧校舎は、特にどこかにガタが来ているというわけでもなく、古い木造校舎とかでもない、どこにでもあるような校舎だった。規模も今の校舎と変わらない。つまり、建て替える必要性は全く感じなかった。

そんな旧校舎だけど、現在は使われていない。

部活とか、委員会とか、補習とか、そんなことに使われている様子も一切ない。もぬけの殻のはずだ。

建て替えの理由に関して生徒の間で色々な噂が立つのは当然だった。

ある人は耐震構造に問題があったからだと言い、ある人は化学の実験に失敗して有毒な物質が蔓延したからだと言い、ある人は、自殺した生徒の幽霊が出るからだと言った。

だけどどの意見も決定打に欠けていた。

もし旧校舎に何らかの問題があるんなら、まずは取り壊してから、その跡地に新校舎を建てるのが普通じゃないだろうか。

色々な謎を孕み、噂好きな生徒の興味を引きつつも手がかりをつかめないままだった旧校舎問題だけど、最近になって新たな進展があった。

幽霊を見た人が複数現れたのだ。

その少女の幽霊は、旧校舎の屋上あたりをぐるぐると行ったり来たりしているところを、新校舎の屋上やグラウンドから目撃されたらしい。

僕はクラスの女子が話しているのを離れたところから何となく聞いていただけだったけど、どうやら学年や性別を問わず、目撃者が数人いるみたいだ。

しかし、その真偽を直接確認した生徒は、僕が知る限りでは皆無だった。

その理由は単純で、旧校舎が現在立ち入り禁止区域になっていて、門も閉じられていて、新学年が始まって2週間で早くも規律を乱そうとするような生徒はこの高校にはいないからだ。

そしてそれは、僕が旧校舎に侵入しなくてはならない理由でもあった。

僕の趣味は隠れ家を探すことだ。誰もいない場所で、お弁当を食べたり、携帯ゲーム機で遊んだりするのは、僕にとって至福の時間だった。

幽霊が出る、しかも誰にも使われていない校舎なんて、隠れ家として最高じゃないか。

以前テンションが上がりすぎて部屋でマイケルのダンスを激しく踊っていたところを偶然妹に見られたときは、3日間ご飯も喉を通らなかった。

だが旧校舎では恥ずかしいことをしても見られる心配はあまりないだろうし、見られたとしても幽霊の仕業になるだろう。

マイケルのダンスを踊る幽霊が学校の怪談として適切かどうかはともかくとして、これで一人遊びにも拍車がかかるといふものだ。

そんな訳で、僕には友達がいなかった。

.....まあそんな事はどうでも良くて、とにかく僕は、人が見ていないときを見計らって、坂道をふさぐ立ち入り禁止のポールを越え、足早に丘の上に向かった。

しばらく黙々と坂を登る行為を続けるとようやく旧校舎の門が見えた。去年までの生徒は毎日この坂を上っていたのか.....。

門は当然鍵がかかっていたものの、その攻略は簡単で、ただ脇にある植え込みに上って入れればいいだけだった。

そしていよいよ一番の難所である建物の扉が目の前に現れた。

まあ、ここに鍵がかかっていたらもうどうしようもないし、さすがにそこまでして隠れ家を探すこともない。このグラウンドを独り占めできるだけでも大きな成果だ。

と思ったけど、驚いたことに、扉には鍵がかかっていた。

僕は少し戸惑いを覚えながらも、めでたく建物内への侵入を果たした。

下駄箱を越えて廊下に出ると、そこにはカーペットが敷かれていた。

それも、学園祭の時に敷かれていたような安っぽいマットではなく、豪邸にあるようなカーペットだった。土足で歩くのは少し躊躇われるので、なるべく脇を通りたくなるような。

そして、壁には絵画がかけられていた。

カーテンが閉じられていて外からは気付かなかったけど、明かりも点いている。

これらのことを総合すると.....、

「この建物、普通に使われてるじゃん」

話が違う。がっかりだ。

っていうかこれはまずい。

立ち入り禁止の看板がある以上、生徒はここを使用しないはずだ。

そこらじゅうに飾られている高級な調度品などから類推するに、今ここを使っているのは先生かそれ以上の人達だろう。

このままでは隠れ家に使えないどころか、見つかって怒られる可能性が高い。すぐに出た方がいいな。

そう思って、下駄箱の方に踵を返すと同時に、目の前にある女子トイレから、水の流れる音と足音がした。

やばい！ 見つかる！

僕はなるべく音をたてないように走ってそばにあるガラス扉を開け、中庭に出た。

しかし、ここはよく見たら廊下の窓から丸見えだった。反対側の窓と違い、こっち側の窓にはカーテンがかかっていなかった。

このままでは見つかってしまう。

焦りながら辺りを見回すと、庭の真ん中に巨大なゴリラの銅像があり、その側には地下に続く階段があった。

僕は数瞬迷った後、そこに飛び込んだ。

それは銅像を取り囲むような螺旋階段だった。去年学園祭に来たときはこんな階段はなかったと思う。電気もしっかり点いてるし、おそらく、現在この学校を使っている人のために後から作られた階段だろう。

だとしたら、ここに逃げ込んでしまったのは、わざわざ敵のアジトに飛び込むような行為だけど、今更引き返すわけにもいかない。

しばらく螺旋にそって降りると、下のほうから水音が聞こえてきた。

それと共に微かに聞こえる……鼻歌？

僕は螺旋階段を下りると、音がする方に向かった。

本来ならここから逃げたほうが良いんだろうけど、テンポと音程を大きく外したような、緊張感とはかけ離れた呑気な鼻歌に引き込まれてしまった。

廊下を進んで、のれんをくぐると、かごや体重計、扇風機や洗濯機などが置かれている部屋があった。そしてその先の扉を開けると、

そこには、全裸の美少女がいた。

「ふんふんふんてってー♪」

その黒髪の少女は、鼻歌を歌いながらシャワーを浴びていた。

しまった！ お風呂場に迷い込んでしまった！

旧校舎に勝手に進入したことに加え、覗きまで……もしこの事が先生にばれたら……うふふ、退学もあり得るかも……。

僕が器用に顔を赤くしたり青くしたりさせながら慌てふためいていると、

「誰かいるのか？」

やばい、気付かれた！

僕は一目散にこの部屋……脱衣所から逃げ出そうとする。

が、その辺に脱ぎ捨ててあった、少女のものと思われる衣類——この学校の制服だ——でうっかり滑って転んでしまった。

慌てて起き上がり、後ろを向きながら再び遁走しようとする、今度は少女が食べ散らかしたと思われるバナナの皮につまずいてしまった。

「んぎゃっ！」

尻餅をついた拍子に、僕は後ろにあったゴミ箱にすっぽり入り込んでしまった。

「うおお、抜けない！」

お尻がはまって身動きがとれない！ 体を揺すって何とか脱出を試みようとする、ゴミ箱が倒れ、僕の体ごとコロコロと転がる。

そこに、先ほどの美少女がお風呂場からでてきた。

少女は僕の姿を確認すると、慌ててバスタオルを体に巻き付け、こちらにやってきた。

これから先生達に突き出されるのだろうか。

こんな情けない格好で。

それで退学になったら離れて暮らしている両親や妹はどう思うだろう。

僕が絶望的な気分にもまれていて、

「可哀想に、みんなに捨てられたんだな……」

少女が意味の分からないことを言い出した。

「クラスみんなに邪魔者扱いされてゴミ箱に捨てられ、命からがら坂道を転がり上がって逃げてきたんだろ？」

「どんな解釈だ！」

僕は自分の立場も忘れて叫んだ。

ゴミ箱にはまりながら坂道を転がり上るって……なかなか壮絶なストーリーだ。

「違うのか？ でもゴミ箱にはまっていることに、他にどんな解釈が？」

「そうだなあ、たとえばお風呂を覗いていたのがばれて、慌てて逃げようとしたら転けてすっぴりはまっちゃったとか」

「あはは！ そんなマヌケな奴がいるわけないだろう！」

裸にバスタオル1枚の少女は、ひとしきり笑うと、僕を倒れている状態から起こして、肩に手を置き、悲しい目を向けた。

「私に気を使わせないように冗談を言っているんだろ？ 君は優しいな」

僕は普通に正直に話してるだけなのに、罪悪感で押しつぶされそうだ！

でも誤解が解けたら解けたで、退学が待ち受けているだけなので、僕は慌てて話題を変えた。

「と、ところで君はこの学校の生徒だよね？ ここは立ち入り禁止だよ？ 何でここにいるの？」

それは本来僕に向けられるべき質問だろうとセルフ突っ込みをしつつ、尋ねた。

「何でもなにも、ここは私の家だぞ」

「へ？」

「ここで自立して一人暮らしをしているのだ！ 偉いだろう」

えっへん、と胸を張る美少女。

「パパが私のことをいつまでも子供扱いして、着替えを手伝おうとしたり、学校に毎日車で送り迎えしたりするのが鬱陶しいから、家出した！」

「家出!？」

「高校に入ったら一人暮らしさせてくれないともう2度と一緒に風呂に入ってあげないって言ったら、新しい校舎を造って、古い校舎は私に譲ってくれることになった。ここなら一人で登下校しても安全だからって」

「新しい校舎って、そんな事……」

「パパはこの学校の理事長だし、お金がたくさんあるからそんなの簡単にできちゃうのだ！」

ニコニコと無邪気な笑顔を僕に向ける少女。理事長の娘だったのか……っていうか、

「そんな理由で新校舎が誕生したのか……」

僕はがっくりとうなだれた。知らない方が良かった……。

それから彼女は僕をゴミ箱から引き出してくれた。

僕はそれはもう見事にゴミ箱にはまりこんでいて、一生懸命僕の両腕を引っ張ってくれていた少女も徐々に、「これが最新のファッションだと主張すれば……」とか、「でんでん虫やヤドカリのような生活も悪くないぞ……」などと弱気な発言をするようになったものの、何とか抜け出すことができた。

抜けるときに、勢いが余って彼女を押し倒してしまい、その拍子に彼女のバスタオルが外れるアクシデントが発生したものの、お互いに忘れることにした。

彼女はバスローブを羽織り、僕たちは、旧校舎の5階に移動した。その階の端から2番目の教室が、彼女の部屋だった。

「そういえば名前を聞いていなかったな」

「僕は1年2組の雨降露乃」

「露乃か。私は佐渡帆希。帆希と呼んでくれ。クラスは1組だ……と、ここが私の部屋だ。着替えるから少し待っていてくれ」

帆希は教室の前で僕を待たせると、部屋の中に入っていった。

ちなみに、教室の扉は一部がガラス張りになっているから、簡単に中を覗けるけど、もちろんそんなことはしない。

しばらくして彼女に呼ばれて中に入ると、そこにはタンスやら天蓋付きのベッドやら色々なものが揃っていて、とても元教室とは思えなかった。

「凄いだろ!? メイドに私の部屋の物を全部運んで貰った。部屋の掃除は私が学校に行ってる間にメイドが全部やってくれるから楽だし」

「それを自立した一人暮らしと言えるのか？」

「むー、そんなこと言って、露乃は一人暮らしなんかしたことないだろ？」

「いや、寮だから一応一人暮らしじゃないかな？ まあ寮費は親に出して貰ってるし、仕送りもして貰ってるから自立してるわけじゃないけど」

「なるほど……寮……寮か……」

腕を組み、思案顔の帆希。突然彼女は悪人のような笑みを浮かべた。

「つまり、露乃が突然いなくなっても、家族は気付かないんだな」

「一体何を企んでるんだ!？」

思わず後ずさる僕。

まだ出会ってから少ししか経ってないけど、早くも彼女の思考についていけない感があるな……。

「よし、今日からここで一緒に暮らそう！」

「え」

「家出した者同士肩を寄せあって生きていこうじゃないか」

「いや、別に僕は家出てきたわけじゃ……ちゃんと寮だってあるし」

「ここだって寮みたいなものだぞ。むしろここの方が学校に近いし、一体何の不満があるんだ？」

不満……は特にないけど、突然そんなこと言われても普通は困るだろう。

寮での生活にもやっと慣れ始めた頃だし。それに今日知り合ったばかりの女の子と二人暮らしっていうのもなあ……。

僕がブルドッグのような渋い顔をしていると、

「たのむ！ ここに引っ越してきてくれ！ 寮への連絡とか、荷物の移動とか面倒な作業は全部私……のメイドがやるから！」

「何でそんなに必死なんだよ!？」

僕の肩をつかんでしつこく食い下がる帆希を不審に思いつっこむと、彼女は俯いてぼつりとつぶやいた。

「寂しいのだ……」

「えっ」

「こんな広い校舎に一人きりで、理事長の娘は狙われやすいからって一人で学校の敷地の外に出ることは禁止されてて、結局家にいるのと大して変わらないし、友達も出来ないし、料理もうまくいかないし、楽しみといえば孤独を紛らわせるためにネット通販で大量に買い込んだゲームや漫画だけ……。自分で望んで一人暮らしを始めたのに……」

「あー……」

確かにこの広い校舎で一人で暮らすのはきついかもしれない。

隠れ家にするのと、本当に住処にするのとではぜんぜん違う。

「3日くらいは裸で広い校舎を走り回ったりして楽しめるかもしれないけど、そんなのはすぐに飽きるだろうし、なかなか退屈そうだねえ……」

「いや、私は別に裸になったりはしなかったけど……」

何故か少し引いている感じの帆希だった。裸になる程度ではお嬢様には刺激が足りないのかな……。

「パパには自立するとか偉そうなこといったのに、本当は逃げてるだけだった……」

帆希の目には涙がにじんでいた。僕は女の子の涙に多少うろたえながら、

「僕も一人でしっかり生活できるようになろうと思って、わざわざ家から離れた学校を選んだ……つもりだったんだけどさ、本当は家族から逃げたかっただけなのかもしれない」

「家庭に何か問題でもあるのか？ よかったら、私に話してくれないか？ 何か力になれるかも……」

涙を拭いて僕の目を見つめてくる帆希。

「僕の妹は……ストーカーなんだ」

我ながら残念な告白だった。

帆希は何を言っているかわからないというような顔をしている。

だけど事実なんだ。詳しいことは別の機会に話すけど。

「だから僕は妹から逃げるようにして家を出た。きっと大抵の人はそんな感じだぜ」

ストーカーな妹はいなくても。

家族から。

生まれ育った町から。

あるいは自分から。

逃げて、逃げ回って、でも「逃げている自分」からは逃げられなくて、仕方なく向き合っていくうちに、いつのまにか自立しているのかもしれない。

「落乃……」

何か言おうとする帆希を遮る。

「それよりゲームしよう」

「えっ？」

突然の話題の切り替えにきょとんとした顔を見せる帆希。

「ゲーム、大量に買い込んだって言ってただろ？ 寮だとそういうの禁止だからさ、そろそろ禁断症状が出そうなんだ。対戦しようぜ。ああ、しばらく、具体的に言えば卒業するくらいまで、ここに住み込んでゲームをやって暮らしたいもんだ」

僕は半ば勢いに任せて、早口で言った。

「落乃！ じゃあ……」

「もう寮には帰らないぜ。さっそく絶縁状をしたためよう」

「ありがとう！ 落乃！」

喜びのあまり高く飛び上がり、僕の腕に飛びついてくる帆希だったが、僕は恥ずかしいのでさっと身をかわした。

「べ、別に同情したからとかじゃないぞ。ただ、僕も友達いないし、規則が多い寮にうんざりしてたから、こっちに来た方が楽しそうだなって……。この前だって、手頃な板を見つけたから寮の共同浴場でサーフィンごっこしてたらめちゃくちゃ怒られたし」

「それは酷い話だな。あれ楽しいのに」

おお、僕の趣味に共感してくれる人がここに……。

喜びのあまり高く飛び上がり、帆希の腕に飛びつく僕だったが、帆希は普通に迷惑そうにさっと身をかわした。

僕はしばらく落ち込んだものの、すぐに気を取り直した。

「そんな事より、ゲームだゲーム」

僕はゲームを捜し求めてゾンビのように辺りを徘徊し始めた。

帆希はしばらく俯いて、それからニヤッと笑った。

「私は強いぞ。何しろゲームばかりやってたからな」

こうして、僕は寮から家出して、旧校舎で暮らすことになった。

2 旧校舎案内

「ギィエエ～！ また負けた～！」

旧校舎に少女の叫び声が響きわたる。

僕と、その隣で悔しげな顔でプルプルと震えている帆希は、5階の一番端にあるレクリエーションルームでひたすら格闘ゲームやレースゲームをプレイしていた。

が、帆希は致命的なほど弱かった。

何回か対戦して、数回負ける度に別のソフトに変えて……ということを繰り返したけど、ほとんど僕の圧勝だった。

普段RPGやアクションしかやらないから、初めて触ったゲームばかりだったのに……。

帆希は負ける度にどんどん機嫌が悪くなり、今や学園の理事長の娘というよりは番長の風格を漂わせている。

たまにわざと負けようとする、帆希はポーズボタンを押して、

「なんだその腑抜けた動きは？ かつて私に最高の好敵手と言わしめた落乃はどこにいったんだ？ さあ、真の力を私に見せよ！」

などと言ってくる。少しは察して欲しい。

その後、違うタイプのゲームで流れを変えようと思い、コントローラーを振り回したり台の上でバランスをとったりするゲームもしたけど、結果は大して変わらず、というよりむしろ悪くなった。

帆希は、勢いよくコントローラーを振りすぎて僕の顔を殴打してしまったり、台の上でバランスを崩して後ろに座っていた僕の上で尻餅をついたりした。

そのうち、まともに対戦したのでは分が悪いと思ったのか、僕がプレイしているときにわざと体当たりしてきたり、体をくすぐってきいたりしてきた。それでも僕が勝った。

そんなことを延々と繰り返し、夜は更けていった。

深夜2時頃。僕がパズルゲームで連勝記録を重ねていると、帆希は、

「まあ、新しく入った仲間に花を持たせるのもリーダーのつとめか……」

などと涙目で負け惜しみを言うと、ゲームの電源を切って立ち上がった。

「あ、もう寝るの？ 実は僕もさっきから半分寝ながらプレイしてたんだけど、僕はどこで寝ればいいかな？」

「な、何……、あのプレイが……半分寝ながらだと……？」

「ああ、うん……」

っていうか、僕はほとんど適当にやってただけなんだけど、帆希がものすごい速さで自滅するから……。

帆希はしばらく下を向いて押し黙っていたが、

「……そうだ、校舎を案内してやろう」

「えっ？ いや、もう深夜だから今日は寝てまた明日に……」

「や！ だ！ 今日これから案内する！」

目に涙を浮かべて叫ぶ帆希。

うーん、機嫌悪いなあ……。ここはひとまず言うとおりにしておこう。

僕たちは部屋を出ると、1階に降りた。

一旦中庭に出て、昼間、帆希と出会ったお風呂場へ続く螺旋階段を下りる。しかし、お風呂場には入らずに、脇にある通路をどんどん進んでいった。

そこには鍵のかかった扉があった。

「この扉を開けると新校舎の中に出る。登下校の時はこれを使ってくれ」

そう言うと帆希は僕に鍵を渡した。

「セキュリティーの問題があるから必ず鍵をかけてくれよ。といっても私もたまにかけ忘れるけど」

それからすたすたと来た道に戻り、今度は食堂に向かった。

食堂は、まだこの校舎が使われていた頃とあまり変わっていないようで、たくさんの長机と椅子が並んでいる。

周りはガラス張りで、外の草花を眺めながら食事ができるようになっているけど、たった二人でこの広い食堂を使うのはちょっと寂しいかもしれない。

「朝ごはんも夜ご飯はここで一緒に食べよう」

帆希は笑顔でそう言ってから、少し恥ずかしそうに、

「悪いけど、ご飯は毎回落乃が作ってくれないか？」

「えっ、帆希は作れないの？」

「作ったことはある。あれは1ヶ月前、私がここに引っ越した日だ。自立した一人前の生活に憧れていた私は張り切って料理を作ろうとした。チキンカレーだ。初めての一人暮らしにテンションが上がっていた私はレシピも読まずに適当な具材を鍋に詰め込み、煮込んだ。校舎全体を包む異臭に気づき、火を止めて鍋のふたを開け、中身を一口食べた私は、次の瞬間には何故か全裸でケタケタ笑いながらグラウンドで踊ってた。間の記憶は全くなかったからどんな味だったかもわからない。食堂の大鍋で作ったから、それからもずっと三食カレーの日が続いたが、そのたびに記憶を失った。そんな日が3日続いたある晩、ついに私は倒れた。中庭の地面の上で目を覚ましたものの、体が痺れて動かない。メイドには昼間に掃除をしに来るとき以外は来ないように言っていたから、私は次の日までずっとそこで倒れていた。いやあ、あの時は泣いたなあ。その後、結局カレーは傷んでしまって、それを処分するときも泣いたけど……」

「……わかった。食事は僕が作る」

「無理しなくて良いんだぞ。自分で作れないんなら、毎日ピザを注文すればいいだけなんだから」

……明日から少し忙しくなりそうだ。

次に僕たちは体育館に向かった。ここはほとんど新校舎と変わらない。

「ここにはボールとか楽器とか色々な遊び道具を用意してもらった」

なるほど、バスケットボールやフリスビーなどがあたりに転がっている。

奥のステージの上を見ると、マイクやアンプ、ギターやドラムなどが埃をかぶっていた。

「……まあ一人で演奏してたらすぐに飽きたけど。で、でも落乃が来たからこれからは二人でバンドを組んで猛練習するぞ！一緒に武道館で演奏しよう！」

言いながら帆希はすぐに出て行って次の場所に向かった。

二人で楽器の練習をする日は来るのだろうか……？

それからプール。

新校舎ではプールは屋内にあるけど、こっちのプールは外にあった。中には水が張ったままで、葉っぱやら何やらで汚れていた。

「最初の頃は地下のお風呂場を使わないで、このプールにお湯を入れてお風呂の代わりにしていた。一度誰もいないプールで好きに泳いでみたかったんだ。でも3月の夜の気候は泳ぐには少し冷たかった……」

校舎の中もいくつか案内してくれたけど、ほとんどの教室は、物が撤去してあってもぬけの殻だった。帆希が使っている5階以外の階はほとんど用はなさそうだ。

5階まで戻ると、帆希はそのまま階段を上って屋上に出た。

「ここから見える風景は、私のお気に入りだ」

僕の周囲には、誰もいないグラウンドや、丘を覆う木々、遠くの方に見える街の灯りや、更にその向こうに見える山、そして、頭上には星空が広がっていた。

「一人暮らしを始めてから、正直あまり良いことはなかったけど、ここからの景色を独り占めできるだけで良かったと思える」

「でもそれももう独り占めじゃなくなっちゃったな」

「ああ。二人だけの秘密だ」

何気ない彼女の言葉にドキッとして振り向くと、そこには月明かりに照らされた帆希の横顔があった。

ゲームで対戦しているときは子供っぽいと思っていたけど、今は思わず見とれてしまうほど大人びていて、僕は……、

「でもこの夜空も良い思い出ばかりでもないな。2週間ほど前、あまりにも星空がきれいだから、メイドに頼み込んでベッドを屋上に持ってきてもらって、星を見ながら寝ることにしたんだ。次の日、起きてみると私が寝ている間に雨が降ったみたいで、周囲はびしょびしょ、もちろんベッドも使い物にならなくなるし、私もひどい風邪を引いた。唯一良かったことと言えば濡れたおかげでおねしょがごまかせたことくらいで……」

「僕のときめきを返せ！」

彼女が口を開く度に残念なエピソードが明らかになっている気がする。

そんな感じで案内を終え、5階のレクリエーションルームに戻ると、帆希は、

「あー、疲れた。もうお風呂に入って寝よう」

と言って、下のお風呂場の方に歩き始めた。

「そういえば、さっきも言ったけど、僕はどこで寝ればいいの？」

「ん……、露乃は私の部屋の隣を使ってもらう予定だけど、まだベッドとかは用意していないから……、私と一緒に寝るか？」

「なっ……！」

「あはは、冗談だ。大人は一人で眠るものだからな。隣にパパとママがいないと眠れなかったのは先月までの話だ」

「なっ……！」

「じゃあどうしようか……」

僕の衝撃をよそに、腕組みをして考え込む帆希。

「そうだ！ 寝るのにちょうど良い教室があった！ 今からちょっと準備してくる！」

そういうと彼女は部屋を飛び出して下に降りてしまった。

待っている間、手持ちぶさたなので、散らかったままのゲームを片づけていると、帆希が戻ってきた。

「さあ、とびっきりの部屋を用意したぞ。そこで寝たら安眠間違いなし」

いやな予感がしつつも、しゅしゅ牛歩で帆希のあとをついて階段を下りる。

4階の奥の教室の前で止まると、彼女は僕に中に入るように促した。

おそろおそろ扉を開けて、一步踏み出すと、そこにはいくつか机が並べられていて、机上には何やらスライムのような粘液が広がっていた。

その横には人体模型が横たえられている。

机の端にはピーカーが置かれていて、そこからもくもくと怪しげな煙が出ていて、何かが腐ったような強烈なおいがする。

「えーと、これは一体……」

「凄いだろう!? 私が考案したスイートルームだ！ ベッドはちょっと堅いけど、特殊な粘液が身体を優しく包み込んでくれて暖かい。それに人体模型を抱き枕の代わりにすることにより得られる安心感は何物にも代え難い。極めつけは私が特別に調合した安眠香！ これを使えば不眠症とは縁のない人生を送れるはず」

「ああ。その場で永眠するだろうからな……」

寮に帰りたくなってきた。

僕はそのスイートルームという名の拷問部屋での睡眠を丁重にお断りすると、結局レクリエーションルームで寝ることにした。

ここのソファだって、結構暖かいからな。慣れれば寮のベッドより安眠できるかもしれない。

。

帆希が隣の自室に戻った後、電気を消してソファに横たわる。

目を閉じて、微睡みながらも今日のことを思い出す。

帆希と出会ったこと。

ゲームで連戦連勝したこと。

校舎の案内で残念なエピソードを聴かされたこと。

スイートルームと称して魔術の儀式のような場所で寝させられそうになったこと。

まあ、色々あったけど――

「落乃、起きてるか？」

ゆっくりと扉が開いて、帆希が部屋に入ってきた。

電気をつけずに、静かにソファーに近づいてくる。

「こんなのしかなかったけど、暖かいぞ」

僕の体が何か柔らかくて暖かい物で覆われる。おそらく帆希が使っているブランケットだろう

。

「おやすみ、落乃」

――ここに来てよかったかもしれない。そう思いながら眠りに落ちる僕だった。

旧校舎に引っ越した3日後、僕は憂鬱な気分で廊下を歩いていた。

ここは2階で、あたりには空き教室や図書室くらいしかない。僕がこの階をのんびり歩くのは初めての事だ。

帆希はまだ寝ている。

今日は日曜だ。

僕が何故そんな休日にダウンナーな気分で、人目を避けるように歩いているのかというと、昨日の朝、

「約束通り寮を出る手続きはメイドさんに頼んでやっておいてもらったぞ」

と言われて、手早い対応に感心しつつ学校に行くと、教室内に、僕が寮で隣の部屋の男子に夜這いを仕掛けて追い出されたという噂が広まっていた。

「こんな手続きの仕方があるか！」

僕は憤怒したものの、帆希は普通に退寮の手続きをしてもらうように頼んだだけで、すべてはメイドさんの独断だったようなので、本気で帆希を怒るわけにもいかず、昨日は一日掛かりで誤解を解いてまわったのだ。

途中からは帆希の部下の諜報部隊にも協力してもらったおかげで、下校時刻までには誤解はほとんど解けた。

それどころか、情報操作が効きすぎて、僕は聖人君子であるとか、神の生まれ変わりであるとかいう噂が広まってしまった。お賽銭を投げつけられて体が痛いぜ。

そんなことがあって、今の僕は肉体的にも精神的にも疲れはてていて、こうして一人で誰もいない廊下をさまよい歩いて気分を紛らせている次第である。

うろうろしているうちにだんだんテンションがあがってきて、スキップしたり口笛を吹いたりしていると、不意に、ザーッ、という水音が聞こえてきた。

「ひゃあ！」

僕はびっくりして尻餅をついてしまった。いたた。まったくもう。

「帆希が水道を使ってるのかな？」

廊下を歩いているうちにもう昼過ぎになってしまったし、さすがに起きる頃だろう。

しかし、水音はいつまでも止まらない。顔を洗うにしても長すぎる。

しかも、帆希はいつも5階のトイレを使用してるけど、この水音は今僕がいる2階の近くから聞こえる。

不審に思って音がする方に向かう。どうやら水音は1階のトイレから聞こえてくるらしい。もしかしたら誰かけしからん人物が校舎に入り込んだのかもしれない。数日前の僕みたいに。

そう思うと急に怖くなって、階段の上から声をかけてみる。

「誰かいるの〜？」

すると、何かがぱたぱたとあわてて移動する音が聞こえた。

僕は恐る恐る下の階に降りて、女子トイレの中を覗いた。

そこには誰もいなかった。

水道の方を見ると、一番手前の水道が全開で、激しい水音をたてている。

床も水浸しだけど、普通に水を出しただけではこうはならないはずだ。まるで頭から水をかぶったような感じだ。

個室にも誰もいないようなので、とりあえず水道の栓を閉めてから外に出てみると、段ボール箱があった。このあたりはあまり通らないから断言はできないけど、以前はなかったはずだ。

何より、廊下のご真ん中に置いてあるのが怪しすぎる。

僕がその段ボール箱に近づくと、それはもそもそと遠ざかっていった。

「誰か中にいるの!？」

僕は怖くなって叫ぶと、段ボール箱はガサガサと逃げていく。

「待ってくれーい」

追いかけると、箱は中庭の方に這っていった。

「あ、そっちは……」

僕が叫ぶと同時に、段ボール箱は地下に続く螺旋階段に入り込んで、そのまま段差をごろごろと転げ落ちていった。

僕は慌ててその段ボールを追って、お風呂場に行くその階段をかけ降りていった。

途中、何故か靴下や下着が落ちていたので、それを回収して階下に向かう。

そこには、段ボール箱と、それにすっぽりとはまりこむような形で、制服を着た少女の姿があった。

「大丈夫か!？」

少女に大声で声をかけるが、返事はない。

大変だ、目が渦巻きになってる！ 気絶してるんだ！

とりあえず少女を段ボールから出そうとして、彼女の体や段ボールが濡れていることに気付いた。

状況から見て、さっき水道を使っていたのは彼女で間違いないだろう。

おそらく彼女は何らかの理由があって裸で水浴びをしていて、それを僕に気付かれて慌てて最低限の服を着て逃げたんだろう。

ふとさっき拾った、彼女のものと思われる靴下や下着と、目の前で気絶している彼女自身を見比べる。

制服とスカートはつけているけど、おそらくその下は……。

僕は段ボールの中でぎりぎりまでめくれあがったスカートや、水で透けているブラウスの方をなるべく見ないようにして彼女を引っ張りだした。

幸い数日前ゴミ箱にはまった僕の時とは違って、あっさりと引き出せた。というより、ふやけた段ボールが破けた。

僕はその少女を床にそっと横たえると、すぐそばにある脱衣所からバスタオルを取ってきて、

それでその少女を覆った。

数分後、ようやく彼女は目を覚ました。

「ん……」

彼女は体を起こすと、ぼんやりした目で僕を見つめた。

「よかった……。もう目を覚まさないかと思ったよ」

僕は目頭が熱くなるのを感じたので、手近な布で目を押さえた。

彼女の方を見ると、顔を真っ赤にしながらいくつか口をパクパクさせているので、金魚の真似をしているのだろうかと思いつつも自分の手の中にある縞々の布切れをよく見ると、それはさっき回収した彼女の下着だった。

僕は慌てて靴下と下着を彼女に返すと、彼女はそれをひつつかんで後ろに隠した。

「このままじゃ風邪ひくよ。すぐ近くにお風呂があるから、服脱いでシャワー浴びた方がいいよ？」

何事もなかったかのように紳士的な声色を使う僕だった。

「どこ？」

「ほら、あっちだよ」

僕がお風呂の方を指し示すと、彼女は立ち上がってそっちの方に向かった。

が、不意にふらついて、倒れた。

「危ない！」

僕はとっさに彼女を抱きしめたものの、支えきれず、二人とも床に倒れ込んでしまう。 かるうじて彼女の頭の後ろに手を回して、床との衝突だけは防いだ。

「だ、大丈夫？」

「うん……」

呆然と僕の方を見上げる少女。

「ふ、ふふ 露乃……！」

寒気がして後ろを振り返ると、そこにはパジャマ姿の帆希が立っていた。

僕の周りにはさっき倒れたときの衝撃でまた下着と靴下が散らばっていた。

端目からは、僕が少女を押し倒して服を脱がせているように見えるかもしれないな、と僕は思った。

僕が帆希に叩かれた頬をさすっている間に、帆希は少女からこの旧校舎に入り込んだ経緯を聞き出していた。

「私は元々女子寮に住んでたんだけど、道を覚えるのが人より少し……かなり苦手で、いつも迷子になってほかの部屋の子に案内してもらってたの……」

少女は話すのが苦手なのか、しばらく黙っていたけど、俯きながらもぽつりぽつりとしゃべり始めた。

「でも木曜日の帰り、いつものように学校内をさまよってたらいつの間にかここに迷い込んで、誰もいないから道を案内してもらおうこともできずに出口を探し続けたの」

「つまりもう3日もずっとここをふらふらしているのか!？」

帆希が驚愕して叫ぶと、少女は頷いた。

僕が来た日とほぼ同時に彼女もここに迷い込んでいたのか。全然気付かなかった。

っていつかこの校舎、家として考えると多少セキュリティーに問題がある気がする。今度帆希と話し合った方が良さそうだ。

「迷うのには慣れたけど、もう限界。お風呂にもずっと入ってないから、我慢できずにトイレの水道の水で体を洗ったら途中で見つかるし、さっきもお腹が空いてふらついたし……」

さっきは空腹で倒れたのか。てっきり階段から落ちた衝撃がまだ残っていたのかと……。

そんなことを思いながら帆希に叩かれた頬をさすっていると、

「大丈夫？」

少女が僕の頬に触れながら心配そうに言う。

「あ、うん。大丈夫だよ。ありがとう。えっと……」

「茜橋凜々。凜々でいい」

「凜々……。僕は雨降露乃。よろしく、凜々」

凜々はしばらくぼんやりと僕の顔を見つめながら頬をなでていた。僕が恥ずかしくなって顔を背けると、

「むー……」

帆希がつまらなそうな顔をして僕たちの間に割り込んできた。

「その、さっきは悪かった……。きちんと状況も確認しないで叩いてしまって……。よく考えたら草食系の露乃が女の子を押し倒すなんてあり得ないのに……」

そういうと帆希も僕の頬をなでてきた。

草食系は余計だ。あと凜々に自己紹介するの忘れてない？

仕方ない、僕が代わりに紹介する。

「こっちは帆希。この校舎の持ち主だよ」

凜々は帆希の顔をのぞき込むと、

「つまりあなたがこの複雑なダンジョンのボス……。ということはあなたを倒せば外に出られるのかしら」

そう言って僕の後ろに隠れて、服の裾をつかんだ。なつかれてしまった……。

「な、なんか私嫌われてないか？」

「そんなことないと思うけど……」

「そ、そうだよな。なあ凜々～、そんな格好じゃ風邪引いちゃうぞ？ 親睦を兼ねて私と一緒に風呂入ろう？」

帆希が猫なで声を出しながら近づくと、凜々は嫌そうな顔をした。

「なんでボスなんかと一緒に入らないといけないの？」

「そう言わずににゃ～ん！」

めげずにさらに猫なで声、というかただの猫の物まねをする帆希だったが、

「やだ」

帆希と凜々は追いかけてこをするように僕のまわりをぐるぐると回った。

結局長時間に渡る説得により、渋々一緒にお風呂にはいることになった帆希と凜々を待つ間、僕は自分の部屋で宿題をやっていた。

昨日、僕の部屋にも帆希の部屋にあるような立派なベッドや机が配備され、僕がついこの間までいた寮からも着替えや本などが送られてきた。

そんなわけで、昨日は午前中に学校が終わってからずっと荷物を整理していて、全然勉強に手をつけていないので、その分を今取り返そうとしているのだった。

そうは言っても、まだ学校が始まったばかりで、大して授業も進んでいないので、帆希たちが部屋に戻る頃には全部終わってしまった。

「というわけで、凜々もここに引っ越してくることになった」

帆希は自室で着替えてから僕の部屋に来るなりそう宣言した。

ちなみに凜々は帆希の服を貸してもらっているようだ。

「えっ？ 本当に？」

「うん。また迷子になったら困るから、ここに住んでもらって、私と落乃が毎日凜々のクラスまで送り迎えすることになった」

まあ、学校に登校する度に数日間のサバイバル生活をするんじゃ大変だろうからなあ……。僕たちがそばについていた方がいいかもしれない。

「女子寮の退寮手続きとか、部屋の用意とかは明日学校が終わるまでにメイドさんにやってもらおうから、とりあえず今日は私の部屋にきてくれ。寝るときはレクリエーションルームのソファを使うといい」

「やだ。この部屋で寝る」

僕のベッドを指さす凜々。

「な、何言ってんだ！ それは落乃のベッドだぞ！ 大人は一人で寝なくちゃいけないんだぞ！」

「そんなことないわ。大人でも子供でも仲がいい人同士は一緒に寝るものなの」

「そ、そうなのか？ じゃ、じゃあ、例えば私と落乃と一緒に寝てもいいのか？」

「それはだめ。私が一緒に寝るから」

何故かにらみ合う二人。っていうか……、

「あの、帆希と凜々が一緒に寝ればいいのかと思うんだけど？」

僕の提案に、二人は顔を見合わせ、

「そ、そうだな。そうしよう」

「まあ、別にそれでもいいけど……」

こうして、また旧校舎の住人が一人増えた。

「じゃあ、今日は凜々の歓迎会だ。出前を頼もう！ ピザを山ほど頼んで明日の朝まで寝ないでパーティーをしよう」

そう言うと帆希は僕の部屋を飛びだしていった。

本気で徹夜するの？ ついさっきまで寝る場所の話してたのに……。

明日学校なんだけどなあ……。

「なあ、帆希はあの通り良い奴なんだから、仲良くしてやってくれよ」

僕が、先程から何故か帆希を嫌っている感じの凛々をたしなめると、彼女はうつむいて、

「ふーちゃんが言うのなら……」

ふ、ふーちゃん……？

「そ、そう言えば、何かさっきから僕にやけになつてくれてる気がするんだけど」

「迷惑？」

「いや、何でかなって……」

凛々は少し顔を赤くして、

「ふーちゃんは私を見つけてくれた……。助けてくれた……。ふーちゃんについていけば……大丈夫」

何かすごく頼りにされちゃった……。

「私、ボスの部屋に戻る。ふーちゃんに言われたとおり、ボスと仲良くしてみる」

そう言うと、彼女は立ち上がり、扉を開けて、振り返ると、

「これからもよろしく、ふーちゃん」

そして、帆希の部屋とは反対の方向にふらふらと去ってしまった。

うーん、心配だ……。

部屋で雑誌を読んでいると、帆希と凜々が入ってきた。

「ピザが届いたからそろそろ凜々の歓迎会をするぞー……ん、そ、それは今週号のハミ通！ 歓迎会はそれを読んだあとでも遅くはないな！」

と言う帆希をレクリエーションルームに引っ張って、僕たちは3枚の巨大なピザを取り囲んだ。やはりピザは熱いうちに食べねば。

ふと凜々の方を見ると、彼女はよだれを滂沱と垂らしていた。

そういえばもう何日も食べていないんだったな……。

帆希もそれを察したのか、一箱を凜々の前に差し出した。

「ほら、私たちはあとでいいから先に好きなだけ食べていいぞ」

そう言って蓋を開けると、中から湯気が立った、海老やら貝やらが載った大判のピザが現れた…
…と思ったら次の瞬間には消え失せていた。

驚いて凜々の方を見ると、彼女は口をもぐもぐさせながら恍惚の表情を浮かべていた。

「あの、凜々？」

呆然としながらも声をかけると、彼女はハッとして顔を赤くした。

「ごめんなさい、私、ついふーちゃんの分まで……」

「いや、それは別にいいんだけど……まだあと2枚あるし」

そう言いながらも一つのピザの蓋を開ける。

今度はチキンが大量に載ったピザだ。

それを帆希の部屋から持ってきたお皿に取り分けて食べる。

くっ、テリヤキソースがたまらん……。

僕は感動の涙を流した。

ふと視線を感じて凜々の方を見ると、彼女はジーーーーーっとならば僕の方に、正確にいうと僕のピザの方に熱い視線を送っていた。

自分の分はとっくに食べてしまったようだ。

「……いる？」

僕が尋ねると、彼女は慌てて、

「でっ、でもそれじゃあふーちゃんが……」

「大丈夫だよ、まだあと一枚あるし」

「……じゃあ……もらう……」

そういうと凜々は口を開けて僕の方を向いた。

僕が餌付けをするような感じで口の中にピザをいれてあげると、さっきまでとは違い、ゆっくりと味わって食べた。幸せそうな顔だ。

帆希は一連の流れをどこか無然とした顔で見れていたが、凜々が僕の2枚残っていたうちの1枚を

食べ終わって、もう1枚を僕が口にに入れてあげようとする、突然割り込んできて自分のピザを凛々の前に差し出した。

「そんなにお腹が空いているんなら、私の分をあげよう！ ほら、あ〜ん」

凛々は帆希のピザをじっと見つめていたが、

「がぶがぶっ！」

「ぎゃああー！」

帆希の手ごとかじりついた。

さすがの凛々もこれだけ食べて満足したようで、3枚目のチーズがメインのピザは丁度3等分にして食べることになった。

僕なんかこれだけでお腹いっぱいだ。

全てのピザを食べ終わると、帆希はゲームソフトを取り出した。

「さあ、朝までゲームしよう！」

にこやかに宣言する帆希。いや、明日学校なんだけどなあ。

このままでは確実に授業中居眠りを……ああ、それはいつも通りか……。

「大丈夫。学校に行く前にしっかり寝ておけば授業中は眠らないですむ」

「それだと学校につくのは確実に昼過ぎだよ……」

サボるつもりなのか。理事長の娘とは思えないセリフだ。

「むー、ゲームによって得られる友情は学校の授業よりも尊いぞ」

「それなら来週の土曜日とかにしようよ！」

「来週は来週でいろいろやりたいことあるし！」

僕たちが言いあっていると、凛々は無言のままゲーム機の前に座り直し、コントローラーを握った。

「さあ……徹夜でゲームしよう……できるものなら」

「凛々……？」

「大丈夫。私に任せて」

不敵に笑う凛々。

帆希はパアッと顔を輝かせ、対戦の準備を始めた。

それにしても凛々は3日連続で迷子のため学校を欠席して、それで今日も徹夜して大丈夫なんだろうか？ 色々な意味で。

しかし、数分後。

「……寝る」

帆希はコントローラーを静かに床に置き、不機嫌な声でそう告げると、そのまま横になってしまった。

二人の格闘ゲームの対戦結果は、凛々のパーフェクト勝ちだった。

僕も帆希との対戦はほとんど勝ちだったけど、凛々の場合は全くゲージを減らされず、帆希のキャラに微塵も行動を取らせずに完膚無きまでに打ちのめしてしまった。

それはやる気もなくなるだろう。さすがに同情を禁じ得ないよ。

まあそんな感じでグダグダな歓迎会も終わってしまったみたいなので、僕はお風呂に入ることにした。

お風呂から出て再びレクリエーションルームにいくと、帆希は相変わらず床に寝転がっていた。そしてその上には凜々が馬乗りになっていた。

「ちょ、どうしたの!？」

「私もお風呂に入りたいからまたボスに案内してもらおうと思ったんだけど、なかなか起きないから……」

凜々はそういいながら体を揺すっているが、帆希が起きる様子はなく、安らかな寝息を立てている……と思ったら口で「ぐうぐう」って言ってるぞ!？」

「そうか、まだふてくされてるのか……。」

凜々もそれに気づいたのか、体を揺するのをやめると、帆希の耳元で囁いた。

「ボスが起きないんなら、ふーちゃんに案内してもらって、一緒にお風呂に入るしかないかも……」

帆希は突然ガバッと起き上がった。

その際に凜々と衝突して二人とも顔を押しえ込んだ。

「な、何を言ってるんだ！ そんなこと許されるわけないだろ！ 凜々はモラルがなくなってないからお風呂でしっかりレクチャーしてやる！」

「自分だってまだ親と一緒に風呂に入ってるくせに」

「なっ、何故そのことを！ ……そ、それは先月までの話だ。今はちゃんと一人で入れる！ さあ、行くぞ！」

帆希は凜々の腕をぐいぐい引っ張ると、お風呂場の方に去って行った。やれやれ。

それから僕は自室に戻ると、明日の準備を整え、しばらくベッドの上で漫画を読んでから眠りについた。

「ん……」

なんだか妙に暖かい感じがして目を覚ますと、隣に凜々がいた。

「うひょっ！ 凜々、何でここにいるによ!？」

僕が奇声を挙げると、凜々が目を覚ました。

「ん……ふーちゃん、どうしてここに？」

話を聞くと、夜中にトイレに行って、帰る時に間違えて僕の部屋に来てしまったらしい。

時計を見ると二時過ぎだ。眠い。

まあこのベッドはかなり大きいし、ちょっと距離を取ればあまり気にならないはずだ。寝よう。

そんなことを寝ぼけた頭で考え、再び意識を手放そうとした瞬間、

「大変だ！ 隣で寝てたはずの凜々がいなくなった！」

帆希がドアを突き破って突入して来た。

彼女はそのまま僕のところまで駆け寄ると、布団をめくった。

「……………」

帆希と、布団の中に潜り込んでいた凜々の視線がぶつかる。

「何故凜々がここに……？」

まずいな……さっきもモラルがどうか言ってたし、これは相当怒ってるかもしれない。早いうちに誤解を解いておこうと思い、口を開きかけると、

「ずるい！ 私だって一人で寝るのはさみしいのに！」

帆希はそう叫ぶと布団の中に闖入して来た。

「何か目が覚めちゃったから、これから朝までここで漫画を読もう！」

また無茶なことを言い出した。

僕が対処の仕方を考えていると、突然僕の携帯電話が鳴り出した。

早速僕がさっきまで読んでいた四コマ漫画を読み始めた帆希を横目に、電話に出る。

「もしもし」

『ああ……お兄ちゃんの声……。聴きたかった……！』

「ひいい！」

思わず電話を切る。するとまたすぐにかかって来た。

『電波が通じてないの？ それよりお兄ちゃん、私今どこにいると思う？ お兄ちゃんのベッドの上だよ。えへへ、お兄ちゃんの匂い……』

電波的な電話の主は妹だった。

妹は中学三年生で、現在の僕と違い実家から学校に通っている。

「……僕の部屋で勝手なことしてないだろうな？」

『うん。余計なことはしてないよ。ただ机に私の名前を彫ったり、壁にお兄ちゃんと私の相合傘書いたり、私の水着写真を飾ったり、パソコンの中の画像を全部私の写真に差し替えたりしただけだよ』

「そうか。ゴールデンウィークになったら帰ろうかと思ってたけどやっぱりやめるよ」

『え？ 今すぐ帰って来てくれるの!?!』

「……………」

はあ。

妹は何も変わっていなかった。

僕の妹、雨降雪乃は昔からこうだった。

いや、昔はまだましだったか。小学生の頃からベタベタしてくるとは思っていたが、最近になって僕を見る目が変わってきた。

部屋にいても、外に出かけても、お風呂に入っている時、寝る時も、四六時中そばについてくる。くっついてくる。それ以上のことをしようとしてくる。

正直気が休まる時がない。

今や創作であっても近親相姦に対する規制は厳しくなりつつあるのだ。

だから僕は逃げ出した。

親に頼み込んで、家から通えないほど離れた高校でもないのに寮に入れてもらった。

断られたらバイトをしてでも寮に入るつもりだったけど、親も僕たち兄妹の状況を良く思ってい

なかったのか、あっさり許可してくれた。

断っておくと、僕は別に妹のことが嫌いなわけじゃない。

ただ、僕も自分の時間が欲しいし、このままではお互いのためにならないと思った。

妹も、見た目は可愛いのに、あれではいつまでも恋人が作れないだろう。

そしてそれは僕も同じだ。

僕に恋人はおろか、友達すらもなかなかできないのは妹が一日中くっついていたからに違いない。

決して僕の性格に問題があるからじゃ、ないよね？

まあそんなわけで妹から逃げ続けて、電話にも出ないで（一日二十回以上かかってくる）、メールにも返信せず（一日百通以上くる）、実家から寮への宅配便（妹の写真がプリントされた抱き枕など）も何とか処分し、今日までやってきたわけだけど、寝ぼけていたのかつい誰からの電話なのかも確認せずに出てしまった。

ってというか、これだけ電話やメールを無視し続けているのに普通に会話をしてくる妹が怖いんですけど！

ともあれもう深夜だし、早いところ電話を切りたい。

「あのさ、僕今寝てただけど……」

『うん。だからかけたんだよ。もしかしたら寝ぼけて電話とってくれるかもしれないから』

「……………」

まんまと妹の策にかかった僕だった。

「そうかい。じゃあもう寝るから切るよ」

恥ずかしさから、わざと不機嫌な声を作ってそう言って半ば強引に通話を終わらせようとする

「何言ってるんだ落乃？ 今夜は寝かせないぞ」

本棚からさっき読んでいた漫画の新しい巻を持ってきた帆希が僕の言葉に反応した。

「今話してるの、ふーちゃんの妹さん？ ……私も挨拶した方がいいのかな？」

凜々も声をかけてくる。

ま、まずい、このままでは……、

『……ねえ、女の声がしたんだけど……。今寝てただよね？ 何で隣に女がいるの？』

鎌鼬のような声が耳に響いた。

僕は思わず携帯を落としてしまった。

や、やばい！ 何とか誤解を解かねば！

とりあえず何か言い訳をしようと携帯を拾うと、すでに通話は途切れていた。

ふう……何かもうクタクタだ。早く寝よう。

拾う直前に『私がそばにいないばかりに悪い虫が……』とか『私のお兄ちゃんを奪う奴は許せない許せない許せない許さない許さない許さない……』とか言ってたような気もするけど、気のせいだと思いたい。

月曜日。

授業が終わると僕は凛々の教室に向かった。

凛々は一人で帰るとまた迷子になってしまうかもしれないので、必ず僕か帆希と一緒に帰る事に決めたのだった。

「おーい、凛々ー！」

凛々の待つ7組の扉を豪快に開けるとまだホームルーム中で、僕はこっぴどく怒られた。

数分後、ホームルームが終わり、僕が教室に乱入すると、凛々は机に突っ伏して寝ていた。

「凛々、もう帰る時間だよ」

僕が声をかけると彼女は起き上がり、廊下に向かう僕のあとをフラフラとついてきた。

それから僕は帆希のいる1組に向かった。

僕は2組で凛々は7組なので、本当は帆希を先に迎えに行った方が早いけど、もし凛々が先に僕たちを探しに廊下に出てしまったら迷子になる可能性があるので、凛々を優先して迎えに行ったのだった。まあ流石にそんなにひどくはないと思うけど念のためだ。

ちなみに、凛々が迷子になりやすい事は7組の周辺では有名な話で、廊下をうろついている彼女を見つけたらとりあえず教室まで案内する手筈になっているらしい。

凛々がついてきている事を確認しつつ1組まで移動すると、帆希がバケツを持って廊下に立たされていたので、僕たちは二人で帰る事にした。

あとで聞いた話によると、このときバケツを持っていたのは先生に命じられたからではなく、雰囲気を出すために自分で掃除用具入れから出してきたらしい。相変わらずよくわからないことを……。

食堂の奥の立ち入り禁止の扉の鍵を開けて、長い廊下を歩く。

やがて旧校舎の地下のお風呂の前にたどり着く。そこから螺旋階段を登ろうとすると、突然凛々に制服の裾をつかまれた。

「どうしたの？」

「……教室に鞆忘れた」

「……………」

7組に戻り、今度こそ忘れ物がないことを確認してからまた旧校舎に向かおうとすると、帆希が追いついて来た。

「全く、読書感想文でギャルゲーの感想を書いて提出しただけでひどい目にあった……」

帆希の言葉を聞かなかった事にして、再び旧校舎の地下に舞い戻り、螺旋階段を上って中庭に出た。そこから階段を上がって5階に向かう。

エレベーターもあるけど、学校内に住み着いていると運動量が減りがちなのであえて階段を使っている。

ようやく自分の部屋の前に到着すると、右隣の教室の扉の前にダンボール箱が大量に並べられていた。

僕はそのダンボールを見て、昨日凛々と出会った時、彼女はダンボールの中に入っていたなあという事を思い出した。そこから芋づる式に濡れて肌が透けた彼女の姿や下着を回想し、思わず「クッククック……」と怪しい笑みを浮かべた。

凛々に頬を思いっきりつねられた。

「これは凛々の荷物だな。昨日のうちにメイドさんに頼んで、女子寮から私物を運んでくれるように言っておいたんだ」

帆希はその教室の扉を開けた。

すると、昨日まで空っぽだったその部屋は、帆希や僕の部屋と同じように、机やソファ、カーペットやフカフカのベッドなどが完備されていた。

「……おおー」

凛々は口をぽかーんと開けて感動しているようだ。

それにしても。

僕は廊下に所狭しと並べられたダンボールを見渡した。

「私物ってこんなにあるの？」

僕の荷物も男子寮からダンボールで送られて来たけど、ゲーム機やパソコンなどは寮で禁止されていたし、まだ一人暮らしを始めて数日しか経っていなかったのも、服や本など3箱しかなかった。

一体あの中には何が……？

とにかくこれだけの荷物があったら整理するのにかなり時間がかかりそうだ。

「その中身運ぶの手伝うよ」

僕の申し出に、凛々はこくりと頷いた。

後ろでは帆希が「私も！ 私も！」とぴょんぴょん飛び跳ねていた。

「うおお……」

結論からいうと、箱の中身は九割型ぬいぐるみだった。

犬や猫、ゾウやキリンやトラやライオンなど、本物だったら動物園が開けるぐらい生物多様性に満ち溢れた動物のぬいぐるみがダンボールの中に詰め込まれていた。

それによってベッドやソファ、その周辺はどんどん埋め尽くされていった。

よく寮の狭い部屋にこんなに置くスペースあったな……。

しかも、

「そんな近くにライオンを置いたらウサギが食べられちゃう……」

などと言って置く場所にもこだわっているのも結局結構時間がかかってしまった。

2時間後。

「ふう……」

僕達は動物王国と化した凛々の部屋を眺めて妙な充足感を噛みしめていた。

帆希がコーラを持ってきてくれたので、それをみんなで分け合って飲む。

そろそろ食事の準備しないとなあ、などと考えていると、凜々が立ち上がり、
「この広さならまだまだ置ける……」
更なる領土拡大を宣言した。

学校から帰ったあと、僕達はレクリエーションルームに集合して遊んでいた。

帆希は据え置き型のゲーム機でアクションRPGをしていて、僕はそれを横から眺めながら時々アドバイスしたりしていた。

「な～落乃、ここは……」

「これは多分……」

そんな感じで話していると、ふと視線を感じる。

左斜め後方をみると、凜々が床に寝転がって小説を手に持ちながらこちらを見ている。

僕と目が合うと彼女はそっぽを向いてしまった。

そんな事が数回繰り返されていた。

話に入りたいのかな？ と思い声をかけようか迷っていると、その様子に気づいたのか帆希はコントローラーを置き、

「り～り～、何読んでるんだよ～」

帆希に飛びついて体をくすぐり始めた。

「ふ～！ う～！」

凜々は唸りながら抵抗して、取っ組み合いになった。

あまりスカート姿でそんな事すると目のやり場に困るから、僕が携帯のカメラ機能を起動する前にやめて下さい。

二人がしばらくこちょこちょがぶがぶやっていると、帆希の足が凜々の鞆に当たってしまい、口の空いた鞆からプリントなどがこぼれ落ちてしまった。

「ああ、ごめんごめん」

帆希は頭を掻きながら教科書やプリントをかき集めると、一枚の紙切れに目を留めた。

「こ、これは数学の小テスト……！」

帆希は震える声でそう呟きながら忌々しげにそのプリントを睨みつけた。

僕も横から覗き込む。これはうちのクラスでも昨日やったな。

「これでわからない問題があったんだ。すっかり忘れてた」

そう言うと帆希は廊下に出て行き、同じ小テストを持って帰ってきた。

よし、たまには僕のかっこいい姿を見せ付けてやろう。

「わからないところは何でも僕に聞いてよ」

「おお！ じゃあこれを教えてくれ」

帆希が最後の問題を指差す。

それを見た瞬間、僕の全身から汗が噴き出した。

なんだこれは!?

何語で書かれてるんだ？

せめて3択にしてくれよ！

ん？ ちょっとまでよ？

「帆希、この紙切れの上を書いてある9って言う数字は……」

「ん？ もちろん点数だけど……」

このテストは10点満点だ。

凜々のプリントをもう一度のぞくと、右上には10という数字と、花丸が記入されていた。

「……ちなみに落乃の点数は？」

「2点！」

その場の空気が凍りつくのを感じる。

「……さっきは何で自信満々だったの？」

凜々に冷静に突っ込まれてしまった……。

帆希もしばらく呆れた顔をしていたが、凜々と顔を見合わせ頷きあうと、僕を見て、

「わからないところがあるなら、私達に聞いて良いんだぞ？」

「……お願いします」

そういうことになった。

僕たちは2階に下りると図書室に向かった。

別にレクリエーションルームで勉強しても良いけど、やっぱり図書室の方が集中できそうだし、せっかく校舎に住み着いてるんだから有効活用しないと。

扉を開け、中に入るとそこにはたくさんの机や本棚が、旧校舎が使われていた当時とおそらく変わらない状態で並べられていた。

レクリエーションルームにも本棚がいくつかあるけど、そこにあるのはマンガやラノベがほとんどだ。たまにはここに来て小説や科学関係の本を読むのも良いかもしれない。

とはいえ、今の目的は勉強をすることだ。入学していきなり落伍しつつある僕を引き上げようとしてくれている二人に何とか応えねば。

しかし。

「ぎゃーっ！ 漫画の三国志が全巻揃ってる！ あっ、こっちの中世の武器の図鑑とかも面白そう！」

帆希は早々に戦線離脱した。

ノートに落書きをしながら、本に囲まれてはしゃいでいる彼女を眺めていると、

「で、どこがわからないの？」

凜々に袖をつかまれた。

「えーと、基本的に全部……」

「……じゃあまずは中学でやったことの復習から」

凜々は本棚から中学生向けの参考書を探し出し、机の上に広げた。

それからしばらく、僕は凜々の説明を聞いていた。

凜々の、涼しいようで暖かい声が3人しかいない図書室に静かに響いた。

いつの間にか雨が窓ガラスを濡らしていた。

「……もう8時」

僕がようやく小テストを半分くらい理解した頃、凜々がつぶやいた。

うおっ、もうそんな時間か。

急いで夕食の準備しないと。

僕は凜々にお礼を言うと、古代中国に意識を飛ばしている帆希を置いて、階段を転がり落ちながらスーパーに向かった。

夕食を食べてお風呂に入り、ひとしきりくつろいだあと、部屋に戻って明日の準備をしていると、突然帆希が扉を開けて入ってきた。

「な～な～落乃～、もう小テスト全部わかっちゃったのか～？」

何故か申し訳なさそうな声色でそう聞いてきた。

「いや、まだ半分ちょいってとこだけど……」

中学の復習に思いのほか時間がかかっちゃったからな。

「じゃあ残りは私が教える！ 今すぐ教える！」

「？ ……うん、お願いしますよ」

それから帆希は黒板に数式や図を書きながら説明してくれた。

小テストは後半になるほど難易度が上がっていき、説明にかかる時間も増えていった。

それでも中学の頃の復習は既に凜々と済ませてあったので、合計30分ほどで全ての問題を自力で解けるようになった。

「ありがとう帆希。二人には何かお礼しないとな」

「いいって！ それより明日は何か小テストないのか？」

「あっ、そうだ、明日物理の小テストあるんだった！ 全然勉強してないや」

「しょうがないな～、私も明日小テストあるから復習もかねて説明しよう！」

帆希は楽しそうにチョークを握りなおした。

結局彼女の講義は深夜まで続き、次の日の小テストは二人とも居眠りをして0点だった。

なにやらまた妙な噂が教室に流れている。

男子寮周辺に幽霊が出るらしい。

僕がその話を聞いたのは、僕と同じクラスで、寮にいた頃はよく互いの部屋に行って遊んでいた友達からだったけど、帆希や凜々たちのクラスにも同じ噂が流れているらしい。

そういえば今僕が住んでいる旧校舎にも幽霊がいるっていう噂が流れてたんだよな。

まあその正体は帆希だったわけだけど、今回はその噂とは少し状況が違う。

旧校舎の場合は、本来人がいないと思われていた建物だ。実際はこの学校を運営している帆希の父親が、独り暮らしをする帆希を住まわせるために明け渡した校舎だったが、そのことを知っている生徒は僕達旧校舎に住み着いている3人しかいないだろう。そんな旧校舎に人影が見えたことから、幽霊の噂が立ったんだろうと推測できる。

だけど今回の噂の幽霊の場合は、男子寮の周辺を深夜にうろついていたらしい。

夜中に出歩く程度なら普通に考えれば仕事帰りの人とか、悪くて不審者とかだろう。

聞くところによると、その徘徊者を幽霊とする根拠は3つあるようだ。

泣きながら歩いていた事。

同じ場所を数時間に渡って往復していた事。

そして、

「『お兄ちゃ〜ん、お兄ちゃ〜ん……』と呟きながらふらふらしていた事。たぶん兄が男子寮に住んでいて、会いに行く途中事故で死んでしまって化けて出てきたんじゃないかって話だ」

帆希が神妙な面持ちで言った。

怖がりつつも、興味津々なのか口元が緩んでいる。

一方凜々はさっきから無言で僕の服の裾を掴んでいる。

「なるほど……」

旧校舎に帰る途中、3人でこの噂を確認しあっていた僕だったが、話を聞くごとに嫌な予感が募っていく一方だ。

っていうか、心当たりがありすぎる！

自分の部屋に帰ってきた僕は、帆希と凜々に見つからないように再び新校舎に戻り、外に出た。

向かう先はもちろん男子寮だ。

坂をおり、横断歩道を渡ってすぐの場所。

ほんの数日前まで住んでいたのにやけに懐かしい気がする。

とりあえず入り口付近を確認して見たものの、目的の人物はどこにもいない。

流石に帰ったのかな？

いや、あいつはそんなに諦めがいい奴じゃなかったはずだ。きっと何処かに潜んでいるに違いない。

裏手の、人気がない場所に回って彼女の姿を探す。

と、その時、突然何者かに後ろから抱きつかれた。

心の準備はすでにできていたので、驚きは最小限ですんだ。

「僕に何の用だ、雪乃」

「だってえ、こんな人気のない所に来るなんて、私とそういう事がしたかったんでしょ？ 私はお外でもいいんだよ？」

そういうと彼女は僕の耳に息を吹きかけた。

「気持ち悪い〜っ！ 離れろ〜っ！」

抵抗してどたばた暴れていると、

「こりゃーっ！ 誰だ裏手で騒いでる奴は！ むっ、雨降！ 貴様また騒ぎを起こすつもりか!?!」

2階の窓から、ガーディアンというあだ名で恐れられている寮監が剣道着姿で竹刀を振りかざしながら飛び降りてきた。

仕方がない、僕は雪乃の手を握ると全速力で逃げ出した。

僕の妹、雪乃とは、数日前に電話で話したきりだった。

それ以降、今まで尋常ではない数だった電話やメールもピタリと止んでいたのも、嫌な予感がしていたんだけど、やっぱりあれからすぐにこっちに来ていたらしい。

「本当はすぐにでもお兄ちゃんに会いたかったんだけど、男子寮にいるはずなのにいなかったし、お兄ちゃんにまわりつく女狐の調査もしないといけなかったし、ずっと我慢してたんだよ。偉い？」

「うん。いい子だね。いい子はちゃんと家に帰って、学校に通おうね」

どうやら彼女は、こっちに来てから中学にも行かず、昼夜を問わず僕の身辺調査をしていたようだ。

本来なら今すぐ逃げたいところだけど、僕の手はさっきから硬く握られている。

「お兄ちゃん、さっき寮監さんが追いかけてきた時、咄嗟に私の事かばって、手を握って逃げてくれたよね。昔からずっとそうだったよね。私は、これからもずっとお兄ちゃんにそうしてもらいたいだけだよ？」

「何言ってるんだよ。これからもずっとそうに決まってるだろ。お互いに結婚したりしても、僕たちが兄妹なのはずっと変わらないんだ。困った時はいつでも助けになるからさ、もうこんな事はやめよう」

「そんなのやだ。私の事だけ見て、私の事だけ考えてくれなきゃダメなの。私がお兄ちゃんと結婚する」

「あのなあ……」

「この前電話した時にお兄ちゃんの隣にいた女に会わせて」

やっぱりそうきたか。

「嫌だ。絶対ろくな事しないだろ」

「帆希さんと凜々さんだっけ？ 可愛いよね？ 今会わせてくれないと、こっそり会いに行っちゃおうよ？ よくわかんないけど、旧校舎の5階あたりに行けばいいのかなあ？」

くっ、すでに調査は終了していたか。

僕が見ていないと何をしでかすかわからない。

不本意だけどここは従うしかないか。

「わかった。ちょっとだけだぞ。二人ともお前が思ってるような関係じゃないから、変な事するなよ？」

「うん。ちょっとお願いするだけだよ♪」

「？」

それから僕と妹は、帆希や凜々について話しながら、しばらく駅前の商店街の店を眺めた。

そうだ、今日の夕食のメニューをスーパーで買っておこう。

ちなみに、なんで校舎の方ではなく、反対の商店街の方に逃げてきたのかというと、

「は、離せー！ 俺はただ教育的指導を！」

「はいはい、話は署で聞くからね」

人通りの多い場所で竹刀を振り回してたらこうなるのは当然だよな。

「今までどこ行ってたんだ！ 心配したんだぞ！」

旧校舎に入って、自分の部屋に入ると、そこには帆希と凜々がいた。

「さあ、早く昨日のゲームの続きを……ん、後ろの人は誰だ？」

「幽霊だよ」

僕が雪乃との関係や、再会した経緯を説明すると、帆希は好奇心に満ち溢れた顔でまじまじと雪乃を眺めた。

「そうかー、この子が露乃の妹かー。想像以上にかわいいなー。私は帆希。よろしくな」

そう言うと帆希は手を差し出し、雪乃も普通にその手を握った。

おかしいな。さっきまでの様子だと、帆希と凜々に敵愾心を燃やしてる感じだったと思うんだけど、今の雪乃はニコニコしてる。

「あなたが帆希さんですか。私は雨降雪乃です。お兄ちゃんがいつもお世話になってます」

「ん、別にお世話なんかしてないぞ。むしろいつも食事を作ってもらったり、遊び相手になってもらったり、いくら感謝してもし足りないくらいだ！」

「いえ、お兄ちゃん、男子寮にいた時よりも楽しそうで、生き生きしてます。きっと帆希さんや凜々さんみたいな素晴らしい方と一緒に生活しているからだと思います」

「え？ いや～、そうかな～？ そんな事ないよ～」

帆希が頭をかいてタコのようにくねくねし始めた。怪しいな。

「そんな事なくないです！ 凜々さんの事も、迷子になっていたところを救い出したんですよね？ 立派だと思います。尊敬しちゃいます」

「えー？ うへへへへへ……」

もうすっかりメロメロになってしまったようだ。

帆希は僕に近づくと、肘でつつんしながら、

「なんだよ露乃～、この前妹さんのことストーカーだって言ってたからどんな子なのかと思ったら、凄く良い子じゃないか～。このこの～」

すでに酔っ払いのようになっていた。

雲行きが怪しくなってきたぞ。

「雪乃ちゃんは今日これからどうするんだ～？ もし時間があるんなら少し遊んでいかないか～？」

「時間はまだ少しありますけど……」

そこで雪乃は一転して表情を曇らせた。

「ん？ 何か悩みでもあるのか？ フッフ、お姉ちゃんに相談してごらん！」

いつからお姉ちゃんになったんだ。

「実は私、お兄ちゃんの事が心配でここまで来たんです。だらしのないお兄ちゃんがちゃんと一人暮らしできるのか……。でも実際にお兄ちゃんと会ってみて、立派に生活しているのを見て、嬉しい半面不安にもなったんです。たった1歳しか違わないお兄ちゃんが何か遠くに行ってしまったみたいで……。やっぱり親元を離れて生活すると変わるんでしょうか？」

「ん？ そ、そうだな。私もここに住んでから結構変わった……。かな？」

帆希は実家に住んでた頃は両親やメイドさんと一緒に寝たりお風呂に入ったりしてたんだもんな。そりゃ変わるだろう。

「やっぱり！ ああ、私も一人暮らししたいな～」

「うーん、さすがに中学生で一人暮らしは早いんじゃないか？」

「でもでも！ 私みたいな子供があと1年で帆希さんのような素敵な女性になれるとは思えません！ 今のうちから練習しておかないと……」

「素敵な女性……。はあはあ……」

帆希が何か興奮してるぞ。

普段子ども扱いされることが多い彼女だから、こんなことを言われたのは初めてなのかもしれない。

どうやら雪乃は帆希の心をくすぐるような言葉を把握しているようだ。どんな身辺調査をしたのか知らないけど、探偵事務所が開けるんじゃないのか？

「さすがに完全に一人で暮らすのは寂しいけど、せめてお兄ちゃんがいるここで生活できれば……ってそんなの迷惑ですよ。ごめんなさい、忘れてください。やっぱり諦めて平凡な人生を歩むことにします……」

「め、迷惑じゃない！ 雪乃ちゃんなら大歓迎だ！ 私達と一緒に暮らそう！」

帆希が最悪なことを叫んだ。

僕は耐え切れずに口を挟んだ。

「ちょっとちょっと！ 雪乃はここから離れた中学に通ってんだろ？ どうするんだよ？ それにお母さんだってきっと心配してるぞ」

「別に離れてるって言っても1時間くらいだし、それくらいの通学時間の子なら私の友達にもたくさんいるよ。お母さんにはもう言ってあるし、ちゃんと許可も取ってるよ」

「何で簡単に猛獣を野に放つような真似をするんだうちのお母さんは……」

まあそういう人だもんな……。

「じゃあ決定だな。これからよろしく、雪乃ちゃん」

「ありがとうございます！ よろしくお願いします帆希さん！」

雪乃は帆希に極上の笑顔を見せた後、僕の方を振り返り、

「……………！」

飢えた肉食獣のような目で僕を見た。

これからどうなるんだ。

あと今日一言も話していない凛々が、不機嫌そうな顔でジーッと雪乃の顔を見ていたのも妙に気になった。

次の日の朝、目覚めると、当然の事のように隣には雪乃がいた。

お腹とかをわざとらしくはだけながら、「むにゃむにゃ」と口で言って明らかに寝た振りをしていることがバレバレな彼女を見て、僕は「ああ、昨日の事は悪夢じゃなかったのか」と思った。

昨日は結局あのあと凜々の時のようにピザを注文して、ゲームをしたりしたのだった。

それから帆希は雪乃と一緒に寝たがったのだが、雪乃は「すみません、今日は兄妹水入らずで過ごしたいんです」と言ってやんわりと断り、現在にいたる。

何かもう全てが彼女の思惑通りにすすんでるよ！

とはいえ昨日まで学校をサボっていた雪乃も今日からはまた登校するようだし、学校に行っている間は付け回されることもないだろう。

早めに準備をして学校に行ってしまうおう。

僕は布団を出て、パジャマを脱ぎ捨て、制服に……、

「雪乃、後ろから抱きつくな」

いつの間にか雪乃が僕の真後ろに立っていた。

「だって、私の目の前で服を脱ぐんだもん……」

「仕方ないだろ。急いでるんだよ。雪乃も早くしないと遅刻するぞ」

「うん、じゃあ私も脱ぐね」

言うが早いか雪乃は勢いよくパジャマのズボンを脱ぎ捨てた。

「……………」

こういう展開は慣れっこだ。騒いだら余計雪乃を調子に乗らせてしまう。

僕は一旦着替える手を止めると、黙って目を閉じ、彼女が着替え終わるのを待つ。

「着替え終わったよ」

「いや、まだだな。たぶん今全裸だろ」

「ちえっ」

それから5分以上もかけてから、ようやく次の声がかかった。

「はい、今度こそ着替えたよ」

あまり見ないように薄目で確認する。うん、ちゃんと着替えてるようだ。

僕は目を開けると、着替えを再開する。

「それにしても時間掛かりすぎだろ。何してたんだよ」

「えっ？ お兄ちゃんの下着姿の動画撮ってた」

「消して！」

僕が雪乃のスマートフォンを奪い取ろうとすると、

「お兄ちゃんも私の下着見たいの？ はい、特別に見せてあげる」

後ろを向いてぺろんとスカートをめくった。

「ぎゃああああああああ！ ノーパンだああああああああ！」

「この程度で興奮しすぎだよお兄ちゃん……」

「この程度で、ってなあ……」

「この程度、お兄ちゃんが寝てる間に私がしたことに比べればなんてことないよ」

「一体何をしたんだ!？」

「お兄ちゃん寝付き良いよね。あんな事してもグーグー寝てるんだもん」

「くっ……何をされたか気になるが知ってしまったら正気を保てるかわからないから忘れることにしよう……」

何故か悪寒が止まらないぜ。

こんな事がこれからずっと続くんだろうか。

「っていうかお前なあ、僕たちは兄妹なんだよ。もうこういうのは止めにしようぜ」

「でも私たち血はつながってないから大丈夫だよ」

「そんなの初耳だよ！」

「お兄ちゃんがないときにお母さんが私にだけ教えてくれたんだもん」

何で雪乃だけなんだ。そんな話を信じれるわけないだろう。

「だって、もし私と血がつながってないことを知っちゃったら、お兄ちゃんケダモノになっちゃうかもしれないってお母さんが心配してたから……」

「どう考えても逆だろ！」

こんな妹より信用されてないなんて……ショック過ぎる。

まあどうせ作り話なんだろうけど。

雪乃によると、事の経緯はこんな感じらしい。

僕の母親には、大学生の頃仲良くしていた後輩の女の子がいた。

その人とは大学を卒業してからも度々会っていて、とても仲が良かった。

母親が結婚して、僕が生まれたときも、「落乃ちゃんって良い名前ですね！ 私も子供が生まれたらそういう名前付けたいなあ」と言っていて、実際次の年に生まれた女の子に雪乃と名づけた。

ところがそれからまもなく、その後輩夫婦は事故で亡くなってしまう。

駆け落ちのような感じで結婚した二人に身寄りはなく、残された娘の雪乃は僕の母親が引き取ることになった……。

「というわけなの。わかってくれた？」

「うん。即興にしてはよく出来た話だけど、嘘だよな？」

「ううう嘘なんかじゃないよ！ だだだから安心して今すぐここ子作りを！」

「思いっきり焦ってるじゃん！ ……う、うわあっ！」

「ど、どうしたのお兄ちゃん!？」

「あ、あれ！」

僕は部屋の扉の窓を指差す。

そこには凜々が無言で立っていて、悪霊のような禍々しい気配を放ちながらこちらを覗き込んでいた。

僕たちの視線に気付くと、凜々は静かに扉を開けて入ってきた。

「い、いつから立ってたの？」

「……二人が服を脱いだあたりから」

「……………」

まずい、何か非常に怒ってるぞ。

やっぱり自分が住んでいるコミュニティの風紀が乱れるのは嫌なんだろう。

何とか誤解を解こうと考えていると、

「あわわ！ もうこんな時間だー！ 何で起こしてくれなかったんだよー！」

帆希がネグリジェにナイトキャップを被り、目覚まし時計と枕をぶんぶん振りながら飛び込んできた。

時計を見ると、登校30分前だ。

遅刻するような時間じゃないけど、朝食を作る手間を考えると急いだ方が良さそうだ……って、

「雪乃！ お前はもうとっくに家出てないとやばいんじゃないのか!？」

「あっ！」

雪乃ははっとした表情で口元を押さえた。

「ど、どうしよう！」

おそらく彼女は見た目ほど慌ててないと思う。

僕に会いに来るために学校をサボるような奴だし。

でも帆希と凜々の前ではまだ優等生のキャラで通すつもりなんだろう。

凜々にはもうばれてる節があるけど。

「大丈夫。そんな雪乃ちゃんのためにちゃんと手は打ってある」

そう言うと帆希は携帯で誰かと話し始めた。

メイドさんかな？

それから3分くらいすると、突然上の方からバタバタバタ……という音が響いてきた。

廊下に出て階段を上っていく帆希に付いて行って屋上に出ると、

上空にヘリコプターが飛んでいた。

ぽかーんと眺めていると、ヘリから梯子が垂れて来た。

「さあ、雪乃さん、乗ってください」

ヘリの中には、メイド服姿の女性が座っている。

ま、まさかこんな物を手配してくるとは……。

さすがの雪乃も冷や汗を顔面に貼り付けている。

「雪乃さん、もう時間がありません。急いでください」

メイドさんに急かされて、恐々とロープに手をかけ、梯子を上る雪乃。

よく見ると手が少し震えてる。

そういえば昔から高いところが苦手だったなあ。

まさかヘリで登校する日が来るとは思わなかっただろう。

少し彼女をかわいそうに思いながら、ふと梯子を上る彼女のスカートの中を覗いた。

別にやましい気持ちなんてない。

ただ、さっきまでノーパンだったから兄貴としてちょっと心配になっただけだ。

果たしてその中身は――

「雪乃おおお！ お前が今穿いてるのは僕のトランクスだ！ この変態妹がああああああああああ！」

僕の絶叫が痴女を乗せたヘリの飛ぶ空に響き渡った。

新校舎に着き、下駄箱に向かう。

旧校舎でもずっと上履きを着用してるから、本当は下駄箱を使う必要はないんだけど、一応新校舎と旧校舎で別の上履きを使い分けている。

下駄箱の蓋を開けると、中から大量のラブリーな感じの便箋があふれ出してきた。

遂に僕にもモテ期が到来したのかと思ってどきどきしながら見てみると、差出人は全て男子寮の住人で、ガーディアン討伐に対する感謝状だった。

中にはガーディアンにちなんで(?)、カーディガンをプレゼントしてくれた人もいたが、かさばるのでそのまま放置しておいた。

僕たちが帰宅して、しばらく3人でゲームをしていると、雪乃が帰ってきた。

「おかえり雪乃。遅かったね」

「うん。一度家に帰って、荷物を取ってきてたから」

「そうなのか。重くなかったのか？」

「ううん。メイドさんがトラックで運んでくれたから」

あのメイドさん色々な技能を持ってるな……。

一度ゆっくり話してみたいものだ。

「それで、荷物の事なんだけど……ちょっと量が多くて」

「僕は手伝わないからね」

雪乃が最後まで言う前にきっぱりと宣言した。

だって、荷物の内容がろくな物じゃないことが容易に想像できるからね。

毅然とした態度を取る僕だったが、

「そんな……うっ……」

「こらっ、露乃！ 雪乃ちゃん泣いちゃったじゃないか！ ほら雪乃ちゃん、皆で手伝うから泣かないで」

「はいっ、ありがとうございます！」

くっ、もう完全に帆希を味方に付けてるな……。

これだと状況は実家にいた時より悪いじゃないか！

帆希と雪乃が廊下に出てしまったので、僕と凜々もしぶしぶ後に続く。

雪乃の部屋は凜々の部屋の隣だ。そこはもう既に整理されて、机や布団が置いてあり、後は廊下に並べられたダンボールの中の私物を並べるだけの状態になっていた。

メイドさん仕事しすぎだろ。

雪乃はいそいそとダンボールを開けると、その中に入っていたアルバムに頼ずりした。

「そのアルバムにはどんな写真が入ってるんだ？」

「お兄ちゃんの過去から現在に及ぶ壮大なクロニクルです。見ますか？」

雪乃がアルバムを大事そうに開き、横から帆希がわくわくした表情で覗き込む。

「おお、露乃かわいいな！ 今もかわいいけど！」

「ほら、この寝顔写真100連発なんて国宝級ですよ！」

何か恥ずかしいな。

今すぐやめさせたいところだけど……。

何かほかに彼女たちの気を引くものがないかとダンボールの中を調べてみると、

「うおおっ」

思わず箱から飛びのいた。

ダンボールの中は全部アルバムだった。

次のダンボールも、その次のダンボールも。

「これ全部僕の写真集か？」

「うん。まさか今までのお兄ちゃんの人生がたった1冊のアルバムに納まると思ってた？」

「そんなに写真撮られた覚えはないんだけど……」

「ほとんど盗撮だから」

「そんな事だろうと思ったよ！」

ふと凛々のほうを見ると、一人で僕のアルバムのうちの1冊を見ていた。

やれやれ、凛々もか。

何やら赤い顔をして固まっているので後ろから覗いてみると、

「うわっ、何だよこの『入浴シーンベスト50～中学生編～』って！」

僕は全てのアルバムを奪い取ると、ダンボールに戻した。

「大事なのは思い出より今だよな！ このアルバムは全部預かるよ！」

「えっ、つまり今入浴シーンを撮らせてくれるって事？」

「違う！ こんなイリーガルな写真は全部処分するって言ってるんだ」

「言っとくけど、写真は全部パソコンにバックアップとってあるから焚書しても無駄だよ」

「じゃあパソコンも没収」

「CDに焼いてあるしオンラインストレージにも保存してある」

「用意周到すぎる！」

結局アルバムの件はあきらめて、他の私物を整理することにした。

意外なことに、アルバム以外は本当にただの私物だった。

ぬいぐるみや、文房具、本など。

兄妹もののマンガがたくさんあったのは気になったけど、まあ許容範囲だ。

中には雪乃の年齢では買えない物もあったような気がするけど、今までの事を考えればかわいいもんだ。

「本当はお兄ちゃんが使ってた枕とか、お兄ちゃんのマグカップとかも持ってきたかったんだけど、それはこれからいくらでも手に入るもんね。さっきのお兄ちゃん言葉じゃないけど、思い出より今だよね」

「やっぱり僕は昔に戻りたいよ……」

妹の異常な性癖に気付いていなかった過去に。

ようやく部屋の整理が終わり、晴れて雪乃もこの校舎の一員になった。

僕もまた一人部屋に戻った。

いやあ、妹と一緒に部屋で過ごしたのは1日だけだったけど、凄い開放感だ。

それから夕食を済ませ、部屋でマンガを読む。

ふと気になって、携帯である人物に連絡を取る。

「もしもし、お母さん？ 今いいかな？」

『ぐふふ、余の事はマザー・ウィズダムと呼べと言っておるだろうが……』

久々に聞く母の声。

因みにウィズダムというのは、本名の千恵→知恵→ウィズダムということらしい。やめてほしいんだけど。

「あのさあ、もう雪乃から連絡があったと思うけど、雪乃もこっちに住むことになったよ。出来ればやめるように説得して欲しかったんだけどね」

『余の強大な力をもってしてもあやつの＜結界＞を解くことは叶わなかった……。全てはうぬに一任する。それが＜預言書＞に記された＜運命＞……』

「息子に丸投げかよ！」

『ふふふ……。この程度の試練を乗り越えられぬ者に余の継承者を語る資格はない……』

「で、ここからが本題なんだけど、雪乃って本当にお母さんの子だよね？」

『ぐぼっ！』

電話口に、何かをぶちまけるような音が聞こえた。

「どうしたの!? また飲めもしないのにコーヒーをブラックで飲もうとしてむせたの!？」

心配する僕の声をやそに、母親は何か呟いている。

『な、何故だ、何故今になって＜古の記憶＞……ミッシングリンクが甦ったのだ……？ <世界の終焉>が近づこうとしている前兆か。面白い、受けて立とうではないか……フハハハハ！

ウワー——ハッハッハッハはっ、社長！ 何でもないですから！ 病院の手配とかしなくていいですからあ！』

電話が切れた。

残業中だったのか。悪い事したなあ。

それにしても、結局雪乃が本当の妹なのか、はっきりしたことはわからなかった。

でもよく考えてみたら、雪乃と血がつながっていろいろがいまいが、彼女によって迷惑を被っているという事には変わりはないし、それと同時に、そんな彼女を少しはかわいいと思っているという事実も変わらない。

彼女が気にしていないんなら、僕が詮索することもないか。

どうせ雪乃と結婚なんてしないしな！

そんな事を考えていると、帆希たちが部屋に入ってきた。

「落乃～、これを見てくれ！」

帆希の手にはアルバムが握られていた。

また僕の恥ずかしい写真を見せられるのかと恐怖したけど、表紙には、『旧校舎の思い出』と書いてあった。

「雪乃ちゃんからまだ使ってないアルバム貰った。今日から皆で少しずつここでの生活を写真に残そう」

それから早速1枚とることにした。

デジカメのタイマーを設定して、机の上に置く。

僕の右腕に雪乃が自分の腕を絡めると、凛々が左腕の袖を掴んだ。

「むー、落乃、人気だな。それならこうだっ！」

帆希は腕を大きく広げると、僕たち3人を後ろからぎゅっと包み込んだ。

しかしタイマーに間に合わず、＼(^o^)/こんな感じのポーズで写っていた。

「じゃあこの写真は後でプリントしてアルバムに張っておきますね」

雪乃は大切そうにデジカメをしまった。

「思い出が少しずつ増えていくといいな。うーん、何かテンション上がってきたぞ！ 今日これから撮影会だーっ！」

帆希はそう叫ぶと、自分の部屋に戻っていき、いろいろなコスプレを持ってきた。

「さあ、これを着て夜の校舎で撮りまくろう！」

女子が着替え始めたので、僕は廊下に出て着替える。

今日の事を、数年後、数十年後、僕は覚えているだろうか？

それはわからない。

でもきっとアルバムは覚えていてくれる。

だから僕は――

「落乃ー、着替えるの遅いぞー！ さき行っちゃうからなー！」

走り出した。

結局この日の撮影会は朝まで続き、僕たちはひたすら写真を撮り続けた。

しかし、この事が僕に思い出から抹消したい出来事で歴代1, 2を争うような事件を生み出すことになるとは、そのときの僕には知る由もなかった。

「はあ、はあ、今回はこの辺にしておくか……」

夜中に始まった撮影会は、あたりがすっかり明るくなる頃に終わりを迎えた。

今いる体育館の時計を見るともう5時過ぎだ。

「どうする？ これから一眠りする？」

「いや、どうせ今日は土曜だから午前で授業は終わりだ。このまま起きて、帰ってから皆で思いっきり寝よう」

確かに、これから中途半端に寝たら逆につらそうだ。

「それに、まだお風呂にも入ってないだろ？ これから皆で入ろう！」

そうやって王様のコスプレをした帆希は僕たちの手を引っ張った。

早速痴女のコスプレ（裸トレンチコート）を脱ごうとしている雪乃と、手に持っている杖で彼女に突っ込みを入れる魔法少女の格好をした凜々を横目で見る。

僕も徹夜明けのテンションで危うく今着ているピエロのコスチュームを脱ぎ捨てるところだったけど、何とか耐えて女子の後に入ることにする。

自分の部屋でうとうとしながら待っていると、30分ほどで湯上りの少女3人組が僕を呼びに来た。

半分寝ていた僕は慌ててバスタオルを持ってお風呂に向かった。

カゴにバスタオルと脱いだコスチュームを入れ、ぬるめのシャワーを浴びていると、外から帆希の声がした。

「おーい、コスプレはクリーニングに出すから持ってくぞー」

「あ、うん」

その時は特に気にせず返事をして、ぼんやり考え事をしながら体を洗い、烏の行水程度に湯船につかり、外に出る。

そこでとんでもない事に気付いた。

「そ、そうだ、着替えの制服持ってき忘れた！」

まずいな、ここから部屋まで着ていくものがないぞ。

まあちょっと恥ずかしいけど、バスタオルを巻いていくか……。そう思い、カゴの中を見ると

「な、ない……」

帆希が間違えて服と一緒に下着やバスタオルまで持って行っちゃったんだ。

つまり、身を隠すものが一切ない。

ど、どうしよう。全裸で立ち尽くす僕。

このまま待っていれば誰か来てくれるだろう。

帆希や凜々なら、事情を話せばちゃんと上から制服を持ってきてくれて事なきを得るはずだ。

しかしもし雪乃が来たら……「助けて欲しいの？　しょうがないな～、私がバスタオルになって、恥ずかしいところは全部手で隠してあ・げ・る♪」などと言ってくるに違いない。
ぶるぶる。

時計を見ると6時半近くだ。

雪乃は7時前には学校に行かないといけないので、もうそろそろ朝食を作ってやらねばならない。

まあ朝食といってもトースト程度なので、雪乃でも作れるだろうけど、僕が当番になってる以上、僕の事を待とうとするだろう。

まあ遅刻しそうになっても、またヘリコプターに乗せてもらうという手はあるけど、メイドさんの仕事を増やしたくないし、高いところが苦手な妹に何度も空路をとらせたくはない。あんな変態でも大切な妹なんだ……。

僕は覚悟を決めると、全裸のまま廊下に出た……。

慎重に螺旋階段を上がる。

大丈夫だ。まださっき帆希と会話してから15分程度しか経ってない。

痺れを切らせて僕を探しに来るような状況ではないだろう。おそらく各自部屋で待機してるはずだ。

しかし一応注意をしておくに越したことはない。

幸いなことに、旧校舎には階段が2つあり、よく使う階段とほとんど使わない階段に分かれている。

入り口から見て一番奥にある階段は使用確率が低い。ここを歩いていこう。

エレベーターを使うという手もあるけど、これはもし偶然エレベーターが到着した際に偶然帆希たちが前を歩いていた場合、逃げ場がないというリスクがある。

階段だったら、足音が聞こえたら近くの男子トイレに逃げ込むという手が使えるからね。

そんな感じで割とあっさりと5階まで着いた。

途中何もなかったというのに、緊張で汗だくだ。

さあ、ここが正念場だ。

ここから自分の部屋に戻るためには数個の空き教室と、雪乃の部屋と、凛々の部屋の前を通らなくてはならない。

徒歩で20秒程度のこの距離が無限にも感じられるぜ。

もし途中で誰かが廊下に出たら、僕はとんだ恥をさらしてしまうことになる。

それに相手だってショックを受けるだろう。

何か絶対に見つからない手はないだろうか？

そうだ、ちょっと下の階に下りて大声を出すというのはどうだろう。

僕が下の階で歌い、その愉快的音色につられて3人が下りてきたと同時にダッシュで反対側の階段から部屋に戻るという作戦だ。

ハーメルンの笛吹き作戦とでも呼ぼうか。

いや、しかしどう考えてもリスクの方が大きいだろう。

ええい、もうどうすれば良いのかは分かっている。

ここから全力で走るんだ。

そうすれば廊下にいる時間は10秒程度。途中で3人が出てくる可能性はほとんどないはず。

よし、行け。

今こそ勇気を示すときだ。

僕は思い切り駆け出した

「うひょおおおおおおおおお！」

しまった、勢いあまって雄たけびを上げてしまった。

だが一度自室に戻ってしまえばこっちのもんだ。扉まであと3、2、1、

「おおおっ！ 勝ったあああああああああ！」

誰に？ そんなことはどうでも良かった。

僕はかつてない興奮に包まれながら扉を開け……

「落乃、湯上り記念！」

パシャリ、という音が聞こえた。

僕の部屋の中には、帆希、凜々、雪乃の3人が揃っていた。

「……………」

僕のベッドの上にいる帆希は、持っていたデジカメを布団の上に落として呆然としている。

ソファで本を読んでいた凜々は真っ赤な顔で口をパクパクさせている。

僕の枕に顔をうずめていた雪乃は目を輝かせている。

「わっ、わわっ」

帆希が正気に戻った。

「そそそ、その、悪気はなかったんだ！ まさか裸で戻ってくるとは思わなくて！ すぐ消すから！」

「帆希さん！ 私に渡してください！ 責任を持って消しておきますからっ！ はあはあ」

「……ふーちゃん……えっち……」

それから、帆希がバスタオルを持って行ってしまったことに気付き、あまりにも申し訳なさそうにしているので、僕は平気な振りをすることにした。

その後、このときの写真がどうなったのか語られることはなかった。

「じゃあ、行ってきまーす」

皆で朝食を食べた後、いつも通り下駄箱まで妹を送った。朝7時少し前。

「ふう……」

思わずふらふらした僕を帆希と凜々が支える。

「大丈夫、ふーちゃん？」

「すまない、私が一昨日バスタオルを持って行ってしまったばかりに……」

あれから二日、僕は風邪を引いていた。

昨日は少し具合が悪い程度だったんだけど、今日になって熱が出た。

原因はおそらく濡れたまま裸で歩いていたからだろう。十中八九。

「いや、全然帆希のせいじゃないって。僕が制服を持って行き忘れなければあんなことにはならなかったんだから」

「でも……」

「とにかく、学校にはちゃんと行ってよ。クラス違うけど、同じ先生の授業はノート見せて欲しいし」

帆希は僕が風邪を引いたのは自分のせいだと言い張って、学校を休んで看病しようとしている。

凜々は帆希が休むのなら自分も休んで看病すると言っているし、さっきも言った通りどう考えても自業自得なんだから、僕に構わず学校に行ってもらいたい。ずっと一緒にいたら移す可能性があるし。

雪乃に至ってはもし僕が風邪を引いてると知ってしまったら100パーセント学校を休んで看病するだろうし、その看病の内容も心配だ。という訳で、彼女には今日学校を休むことを伝えていなかった。

勘が鋭い奴だから気取られないか心配だったけど、どうやら気付いていないようだった。

「わかった。学校が終わったらすぐ帰るから、ゆっくり寝てろよ」

帆希と凜々はなおも心配そうにしていたが、のろのろとした足取りで外に出て行った。

ふう。最近環境が急に変わったりして少し疲れてるし、今日はゆっくり休ませて貰おう。

雪乃に気付かれないために制服に着替えていたので、それを脱いでパジャマを着なおす。

布団にもぐると、遠くから学校のチャイムが聞こえてきた。

.....

.....

.....

.....

.....

目を覚まして起き上がると、何かが太ももに転がり落ちた。

これは、濡れたタオルだ。乗せたばかりなのか、まだ冷たい。

アニメとかマンガで風邪を引く話の時はよくおでこにこういうタオルを乗せる描写があるけど、実際にやってもらったのは初めてだ。

もう帆希が帰ってきたのかな？ まだそんなに寝てないと思うけど。

ふと気配を感じて横を見ると、メイド服を着た女性が膝立ちでこちらを覗きこんでいた。

「うわわっ」

「まだ寝てないと駄目ですよ」

そう言うとメイドさんは僕に布団をかぶせ、またタオルを頭の上に乗せてくれた。

「あの、ずっと見てくれてたんですか？」

「はい。お嬢様から落乃さんがお風邪を召されたという連絡をいただいたので」

この人が帆希のメイドさんか。

雪乃がヘリコプターで登校するとき一度離れた場所から見たけど、間近で見ると若くて綺麗だ。二十歳くらいだろうか。

帆希の話聞く限りではどうやらここには一人しかメイドさんがいないようだし、この人が校舎の掃除や植物の手入れ、防犯などを一手に引き受けているのだろう。

「あの、すみませんいつも。面倒なことを全部やってもらってるみたいで……」

「いいんですよ。お嬢様の近くにいられて幸せですし、それにこの生活も結構良いことがあるんですよ……」

「？　そうですか……」

「それよりもうお昼ですよ。食欲はどうですか？　とりあえずリンゴを用意しておきましたけど」

「あ、はい、いただきます」

メイドさんは机の上に置いてあるリンゴとナイフで剥くと、フォークで刺して、僕の口元に運んだ。

「はい、あーん」

「あ、いや、自分で食べれますから！」

「遠慮しないで良いんですよ」

半ば強引にリンゴを口の中に押し込められる。

それから5分ほどで食事を終え、菓を飲む。一人でリンゴ丸ごと1個食べると結構多く感じるな……。

それにしてもさっきのタオルといい、なんてベタな展開なんだ。

この調子で行くと次は……、

「そういえば落乃さん……」

メイドさんが僕の首筋の辺りを見つめる。

ま、まさか……。

「汗が凄いですね。拭いてあげます」

やっぱりいいいいい～！

「い、いや、本当にいいですから！」

「駄目です。大人しくしてください」

そう言うとメイドさんは強引に僕の服を脱がせ、濡れたタオルで背中を拭き始めた。

「……………」

背中を拭き終わると、次は腕を拭いた。

二人とも無言だ。

それから前に廻り、胸やおなかを拭う。

それが終わると、いきなりズボンを脱がされた。

「ちょ、下は自分でやりますって！」

「こんな時に何恥ずかしがってるんですか。じっとしててください！」

メイドさんは僕の静止も聞かず、さっきよりも強い力で足を拭き始めた。

膝の辺りに彼女の息がかかる。何か少し興奮してないか？ 顔も赤い気がする。

ふと机の上を見ると、さっき食べたリンゴの皮やナイフの他に、スケッチブックが置いてあった。

そして開いてあるページに描いてあったのは……。

「さあ、最後はここですね……」

メイドさんは遂にトランクスを脱がそうとしてきた。

「ま、待ってください」

「何ですか、この期に及んでまだ抵抗するんですか？ 無駄だと知っていながら。くふふ」

何かキャラが変わってきたぞ。

それより。

「これは何ですか？」

僕はスケッチブックを指差した。

そこには僕の寝顔や、リンゴを食べる姿、裸の背中などが描かれていた。

「まさか、絵のヌードモデルのために僕を脱がせようと……？」

「ち、違います！ これは、その、ただの退屈しのぎというか、体が勝手に……………」

「……………」

メイドさんをジト目で見てみると、最初は焦りの色を浮かべていた彼女は、やがて俯き、

「お願いします！ 夏コミの新刊……じゃなくて芸術のために協力してください！」

土下座してきた。えー。

「さあ、早く私に全てを委ねてください！ あなたはただ私に言われたとおりのポーズを取ればいいんです。そうですね、今は風邪を引いているから無理はさせませんが、いずれは私の服を着て男の娘のモデルを……………」

「嫌だあああああああ！」

そうだ、思い出した。このメイドさん、僕が寮を出るときに、退寮届けを出す代わりに、僕が隣の部屋の男に夜這いを仕掛けて追い出されたという噂を流したとんでもメイドさんじゃないか

！

何で今まで無邪気に信用してたんだろう。

必死に抵抗したものの、メイドさんのパワーとスピード、そしてガッツに押され、ついにトランク스에手がかけられた。

「優しく……してね？」

僕が諦めて目を閉じた瞬間、第三者の音が部屋に響いた。

「お兄ちゃんから離れて！」

「雪乃！」

そこには学校に行ったはずの僕の妹が立っていた。

「どうしてここに!? まだ帰ってくるような時間じゃないだろ!？」

「ふふふ、私がお兄ちゃんの体調の変化に気づいてないと思った？ 学校に行くふりしてずっと影でお兄ちゃんの事見守ってたんだよ。まあすぐにこのメイドさんが来たせいで何もできなかったけど」

やっぱり気づかれていたのか。

いつもは名残惜しそうに学校に行くのに今日はやけにあっさり行ったと思ったらそういう事だったのか。

メイドさんはやれやれと肩をすくめると、

「今日のところはこれくらいにしておきましょう。しかしまだ諦めたわけではありません。私は何度でも甦るでしょう。この世に同人があるかぎり……」

そして彼女は煙玉を床に叩きつけ、煙幕と共に消え去った。

「メイドさん！ スケッチブック忘れてるよ！ 持って帰って！」

雪乃はしばらくスケッチブックを眺めて、「この絵柄はまさかあの成人向けの兄妹物専門サークルの……」とか、「今度会ったらぜひサインとリクエストを……！」とか言っていたが、僕の方に向き直ると、

「大変だったね、お兄ちゃん。熱は大丈夫？」

「ああ、だいぶ良くなったよ」

また妹に心配をかけて学校を休ませてしまったのは遺憾だけど、おかげで助かった。

今回ばかりは妹に感謝しないとな。

彼女が食堂から持って来てくれたスポーツドリンクを飲んで一息付いていると、

「ところでお兄ちゃん」

妹が僕の全身を熱い目でみている。

しまった、まだトランクス一丁のままだった。

「また汗かいてるね。私が綺麗にしてあげるね」

妹は手をわきわきさせながら僕に迫り、

「~~~~~」

旧校舎に僕の断末魔の音がこだました。

結局妹の献身的な看病のおかげで次の日には風邪は治ったけど、何か大切な物を失った気がする。

「ん、これなら学校に行っても大丈夫だな」

そう言うと帆希は少しほっとした顔をしながら僕の額に当てていた手を離した。

今度は凜々が近づいてきて、僕の額に自分の額をくっつけた。

鼻先が触れそうなほど近づく。

「36度8分。学校に行くのに支障はない」

耳元で囁くと彼女は顔を離した。何故か顔が少し赤くなってる。

その様子を見ていた雪乃が唇と唇をくっつけようとしてきたので、全力で引き剥がした。

色々な目にあっただけ、風邪はすっかり治ったみたいだ。

僕は回復をアピールするためにあちこちジャンプして廻った。

すると弾みで机の角に膝を痛打してしまい、僕はうずくまった。

「ふーちゃん、まだ本調子じゃないんだから暴れまわっちゃダメ」

凜々に冷静に怒られた。ふう、悲しい話だぜ。

学校から帰ると、僕たちはまたこの前みたいに図書室に向かった。

あとから帰ってきた雪乃も混ぜて勉強会だ。

1時間ほどで復習を終えると、そろそろ食事の準備の時間だ。

「じゃあそろそろご飯作りに行ってくるよ」

そう言って席を離れ、僕は商店街に向かった。

旧校舎での食事に関しては全て僕が担当している。

帆希の調理のスキルに関しては、彼女と出会ったときの会話で察しはついた。

凜々は一度夕食を作ってもらったことがあるけど、すぐ近くにある醤油を探しに行って、2時間後に何故か屋上のあたりをうろうろしているのを発見されて以来、彼女に一人で料理を作らせたことはない。

雪乃は料理自体は実家にいるときに何度か作ってもらったことがあるけど、何故か僕だけスープや飲み物の色がピンク色で、「お兄ちゃんのみだけ特別な調味料を使ったの。何を入れたのかはヒ・ミ・ツ♪」などと言い出した過去があるので、彼女には最初から頼まないことにしている。

そんな訳で、大して料理が出来るわけでもないのに消去法で料理当番を引き受けている僕だけど、最近では結構楽しくなってきた。

途中の本屋で少し新刊のチェックをした後、スーパーでカゴを手にぶら下げて色々物色していると、聞き覚えのある声が耳に届いた。

「このお菓子なんか変なロボットがオマケについでる！ 早速全部そろえよう！」

「ダメ。おやつは315円まで」

「ケチー！」

……帆希たちだった。

「みんな！ どうしてここに？」

僕が彼女達に近寄ると、3人もこっちに気付いて手を振った。

「まだ病み上がりだし、今日はお兄ちゃんを手伝おうと思って」

「えっ、別に気にしなくて良いよ。もう完全に治ったし」

「いいからいいから」

そう言うと帆希はカゴを僕の腕から抜き取り、中にお菓子を入れた。

凜々はそのお菓子を元の場所に返しながらか、

「今日は私達に任せて」

それから僕は3人にくっついて店内を一周した。

どうやら彼女達はカレーを作るようで、肉やら人参やらがカゴの中に入れられていく。

野菜がカゴの中に入るたびに、帆希がこっそり取り除こうとしたけど、凜々に見つかって叱られていた。

雪乃も何だかんだで結構しっかりしてるし、これなら安心かな。

「野菜入れないでビーフとポークとチキンとシーフードをふんだんに使ったカレーにしようよ～」

「めっ」

「そうですよ帆希さん。それよりお兄ちゃんが積極的になるようにうなぎとマムシとすっぽんを入れましょう」

……やっぱり不安だ。

っていうか雪乃は既に帆希たちの前でも自重しなくなってるな。今更か。

買い物が終わると、僕たちは4人で学校の近くの公園に立ち寄った。

「そういえば帆希って、親に外に出ないように言われてるんじゃないかな？」

帆希の親、特に父親はとんでもない子煩悩で、それなりに大きな私立の学校の理事長の娘である帆希が誘拐されたりしないか常に心配しているのだ。

だから今まで夕食の買い物に誘わないで一人で出かけてたんだけど、

「ああ、今は私一人じゃないから多分大丈夫だ。ダメだったらメイドさんに止められてるだろうからな」

そうなのか。

帆希に遠慮して必要なとき以外はあんまり出歩かないようにしてたけど、これからはみんなで外出する機会を増やそうかな。

旧校舎に戻る頃にはもう日も落ちかけていた。

僕たちは直接食堂に向かうと、荷物を置いて手を洗い、早速食事の準備に取り掛かった。

帆希は、僕に休むように言ってきたけど、結局4人で作った。

いつもは時間を効率よく使うために、僕が調理している間、残りの3人はレクリエーションルームか自分の部屋で各自過ごすように言っている。そして料理が出来たら携帯で呼ぶというシス

テムにしていたんだけど、皆で作るとさすがに賑やかだ。

凜々は食事を作っている途中にふらふらと物を探しに行ったまま迷子になってしまう以外は問題ないので、調味料を探したり物を運んだりするのは料理が苦手な帆希がすることになった。

雪乃は僕の料理に何か変なものを混入してしまう可能性があるのが心配だったけど、凜々がしっかり見張っている。

一人だと出来ない事でも3人だと出来るみたいで、恥ずかしいことに僕はほとんど足手まといだった。

「出来た！」

カレーの良い匂いがあたりに充満している。ふひょー！ テンションが上がってくるぜ。

帆希が用意したお皿に僕が盛り付けて、各自自分の席に運んでいく。

「落乃！ 私の野菜抜きで肉多めな！」

「ふーちゃん、ボスを甘やかしちゃダメ」

ジャガイモに火傷しそうになりながらも辛口のカレーを食べていると、正面の帆希が不安そうに僕の顔を覗き込んできた。

「なー落乃、今日の料理、どうだった？」

「え？ もちろんおいしいけど……何か問題あった？」

「そうじゃなくて、3人がいて邪魔じゃなかったか？」

「いや、むしろ僕のほうが邪魔だったような……」

凜々がやたら張り切ってどんどん作業を進めてたから、僕はジャガイモとかニンジンの皮むきくらいしかしてないぞ。

「邪魔なんかじゃない」

3杯目のおかわりをよそいに行ってた凜々が珍しく大きな声ではっきりといった。

「ふーちゃんは毎日一人で料理作ってるし、全員分の洗濯物運んだりしてる。これからはみんなと一緒にそういう事したい。だめ？」

「それはありがたいけど、でも……」

このメンバーの中では一番体力があるであろう僕が色々率先してやるのは当然だと思うし、全員で洗濯物を運んだり料理を作ったりしたら効率が悪くなりそうだけど……。

そう言うと帆希は、

「効率よりも大切なものがあるぞ」

「えっ」

「せっかく皆で共同生活をしてるんだから、仲間同士で協力して作業した方が得られるものも多いただろうし、それに……」

「私は、皆で料理を作って楽しかった」

「……………」

確かにそうだ。

ここで皆と暮らし始めて、僕も少しは変わったかもしれないと思ってたけど、まだ一人を好んで隠れ家を探してたときの考えが抜けていなかったみたいだ。

3人の笑顔を眺め、いつもよりおいしく感じるカレーを食べながら僕は頷いた。

こうして、次の日から家事は何でもみんなでワイワイガヤガヤぶつかっていくことになった。

旧校舎での生活は何が起こるか分からないけど、家出少女3人を眺めてると、どんな問題が起きてても大丈夫な気がしてくるな……。

「よし、メニュー考えるの面倒だから今日は目を瞑って適当な物を買って、闇鍋をしよう！」

「大賛成です！ うふふ、暗闇に乗じて私にあんなものやこんなものをお兄ちゃんの口にねじ込むチャンスが到来するなんて……」

「反対！ 反対！」

大丈夫、だよな？